

リンネ「この声は……
燕尾服仮面様！」

ルシエド

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

燕尾服仮面「震（しん）、坎（かん）、兌（だ）、離（り）！ 弧月拳舞！」（陰陽大戦
記感）

「やだ……かつこいい……」

燕尾服仮面「このルアーの名前はスケルトンG……スパイラルキャスト！」

「やだ……かつこいい……」

目次

不敗を目指す者達へ

- だからみかんのCMで「おしりをふりふり」とかやってんのは意味わかんねって
言っただろ!?!? | 1
- 正解は、越後製菓! | 24
- コウシワア、ガイコクジン。レッスン
ワア、シヨウニンズウ。ノヴァツ! (駅前
留学) | 45
- 百人乗っても! 大! 丈! 夫! | 73
- バザールでござーる、君はどこに行つて
しまったんだい……? | 107
- じゃほにかじゃんけんじゃほにかほいで

だからみかんのCMで「おしりをふりふり」とかやってんのは意味わかんねって言うってんだろ!?

リンネ・ベルリネッタは登校途中、壁にマジックで書かれた落書きを見て、目を留めた。

『もうマジ無理。彼氏とわかれた。ちよお大好きだったのに、ウチのことわもうどおでもないんだって。どおせウチわ遊ばれてたってコト、いま手首灼いた。』

”こんな壁の落書きに少し共感してしまうなんて”と、リンネは心底自己嫌悪に陥ってしまう。

なお、彼女は前半だけ読んで先に進んだため、後半の一刀火葬の流れを読んでいない。女性の悲痛な叫びだと勘違いしている。後半まで読んでいたら、共感なんてしなかっただろうに。

リンネは比較的内気な少女である。

なのに頑固で、微妙に協調性より自分の我を優先することがある。

孤児院出身の身でお金持ちの家に引き取られるという、大多数の人に見下されつつ嫉妬されるという身の上まで完備。

容姿も悪くなく、感情豊かでいい反応を見せるタイプで、何か問題があれば周囲に相談するのではなく我慢することを選ぶ性格という、いじめの的にされる要素の塊のような少女であった。

要素だけでいじめられることはない。

いじめられるかどうかは多大に運が絡んで来る。

そしてリンネは、昔から極めて運が悪かった。

孤児院時代から同年代によくいじめられてしまうくらいには。

「はあ……」

登校途中に、思わず溜め息が漏れてしまう。

それも仕方のないことだろう。

昇降口の下駄箱に行けば、まず確実に上靴が隠されている。

廊下を歩けば、ひそひそ声と笑い声がこっそりと聞こえる。

教室に行けば机が切り刻まれていて、便所の水が机の中に満ちていることさえある。

ゴミ箱のゴミがロツカーに詰まっているかどうかさえ、運次第。

それが、悪質ないじめを受けるリンネの日常だった。

(あ、今日は上靴がちゃんとある。最近あんまり隠されてないな……)

下駄箱を開けると、そこには少し泥の付いた上靴だけがあった。

リンネの下駄箱はいじめのツールと化している。朝開けると、上靴は既に捨てられていて、ゴミが詰まっているだなんてことも日常茶飯事だ。

だが、最近はどうでもない。開けた下駄箱の中は掃除をした直後のように綺麗で、上靴は捨てられた後誰かが拾ってきたかのように、少し泥が付いているだけ。

ここ最近、下駄箱のいたずらも——リンネの麻痺した感覚だと——控えめになっていた。

(……教室に行くのも、気が重いな)

教室に行けば、いじめっ子が居る。

かといって、行かなければ欠席扱いになって親に心配をかけてしまう。

覚悟を決めて教室に行ったらリンネは、まだいじめっ子が来ていないのを見てホッと、隣の席の男の子に話しかけた。

「おはようございます、ドローン君」

「おはよう」

彼の名前は『ライ・ドローン』。車っぽい名前だ。

遠隔操作魔導器の名は体を表しているようで、彼は変身魔法と物質操作魔法の大家、その一人息子である。

この学校でも指折りの家格、指折りの魔法の腕を持つていられると言われていた。

「先生、まだいらっしやってないんですね」

「いじめっ子もまだ来てない。隠れてるってこともない」

「……」

「聞きにくいことでも、前置きなしに聞いていい。僕は答える」

「……ありがとうございます」

少年は『落ち込んでる人の励まし方』と銘打たれた分厚い本を読みながら、リンネの方も見ないまま話し、彼女が本当に聞きたがっていたことを教える。

「あなたは、いつも本を読んでもすね」

「暇潰し」

「……そ、そうですか」

会話終了。

まるで会話が続かない。

この少年、コミュ力が絶望的だった。

「え、えつと、分厚い本ですな!」

「本が重いから、手が鍛えられる。」

ベルリネットさんと握手した時、また手を傷めないようにしようと思って」

「そ、その節は本当にすみません……」

「気にしなくていい。情けない僕が悪い」

リンネが会話を続けようとしても、中々会話が続かない。

いじめられている彼女はクラスメイトから距離を取られており、他のクラスに少し話せる相手が居るくらいで、クラスで話してくれる相手がこの少年くらいしかいなかった。

いじめられている自分と普通に接してくれる彼にリンネは感謝していたが、この会話のノリがどうにも肌に合わないでいる。

「あ、居た居た」

それでもどうにか話が繋がりがかりかけてきた、そんな時。

リンネの耳に聞き覚えのある声が届き、少女は表情を硬直させて振り向く。

そこには、リンネを普段からいじめている三人の少女が居た。

「ベルリネッタさん、ちよつといい？」

「……はい」

ここで付いて行かなければ、後でもっと酷いことになる。それを知っているリンネは、大人しく付いて行くしかない。付いて行ったその先で、酷い目に合わされることが分かっている。

クラスメイトは、皆見て見ぬふりをしている。

止めれば次は自分がターゲットにされると分かっているからだ。

「……」

連れて行かれるリンネを、少年が無表情のまま——よく見れば心配そうな目つきで——じっと見ている。

その視線に気付いたのか、リンネは強がりの笑顔を浮かべた。

「心配しないでください。ね?」

ぎこちない笑顔を浮かべて、リンネはいじめっ子に連れて行かれる。

その言葉が、少年に何やら覚悟を決めさせたようだ。

「……」

少年が本を閉じ、少女達が教室を出てから数分時間を空けて、後を追うように部屋を出て行く。

少年が出て行くと、リンネが連れ去られた時は見て見ぬふりをしていたクラスメイト達が、無言のまま目を合わせ、神妙な面持ちで何度も頷いていた。

リンネは小体育館に連れて来られていた。

大体育館より小さく、大体育館が部活動で使われている時に一般生徒が遊ぶ時に使う体育館だ。

いじめっ子はここにリンネを連れ込んで、扉の鍵を閉めるといふ念の入れ様を見せていた。

これでは、偶然助けが来るといふことも期待できない。

「ここに犬のフンがあるんだけど、どう思う？ ベルリネットタさん」

「あの、本気でやめてください」

「もっとやろう」という集団心理の熱に浮かされ、「これやりすぎかなあ」と良心の呵責に苛まれつつ犬の糞を持って来て、「やっぱやめようかなあ」と思いつつ他の二人の手前引くこともできないままここに来て、リンネの反応を見て少し加虐心を刺激され、やらかす寸前のいじめっ子。

三人の少女のいじめっ子はサイコパス等ではないため、人らしい心も持ち合わせてはいるが、その場のノリや集団心理で良心を無視してしまえるのが人間というものだ。

いじめとはエスカレートするもの。

インターネットでならば、自制心のある大の大人でさえ嬉々としていじめに加わる昨

今、子供であるならばなおさらだ。

リンネが思わず目を瞑ってしまった、その時。

「待ていー!」

どこからか飛んで来たバラが、犬の糞が入ったビニール袋を貫いて、いじめっ子の手から奪ったそれを壁に磔にした。

「! 何奴ッ!」

ビニール袋の中身を一切こぼさないまま、壁に磔にする高度な技量と威力。

これは肉体の技だけでできるものではない。

高度な魔法の腕がなければ到底不可能だ。

ただ者ではない乱入者の存在を認識し、いじめっ子は振り返って叫ぶ。

そこには、バスケットゴールの上に格好良く立つ、白い仮面と黒い燕尾服の男性が居た。

「あれは……燕尾服仮面様!」

「燕尾服仮面様? 誰それ?」

「知らない。でもあの仮面はシャレオツね」

「燕尾服仮面様、それはこの学校に伝わる伝説の男!」

神出鬼没、常に燕尾服と仮面を付けてほしい高い所から現れる!

この学校の変身魔法を使う学生ではないかと言われるも、その正体は謎の中!

この学校で誰かが困っていると颯爽と現れ助けるといふ、世界で最も新しい伝説! かつて怪我と病欠で魔法野球部が大会に出れなくなりそうだった時!

突如として現れて、幻の六番^{シックス}ショート^{スモーン}として参加!

野球素人の腕を補う魔法の腕とガッツでチームを支え、地区大会優勝に導いたと聞くわ!

燕尾服と仮面を付けながらボデイスラも躊躇わないその姿は、仲間達の胸を打ったという!

「サラ! 詳しすぎて気持ち悪い!」

「長すぎて耳にも頭にも入って来ないわよ!」

どこの誰かは知らないけれど、乙女は皆知っている。

「小学校にはびこる妖魔、いじめっ子共よ聞くがいい」

「な、何よ!」

「虚しいとは思わんかね。君達はベルリネット嬢を屈服させたいのだろうか?」

軽やかにマントをなびかせて、燕尾服仮面はリンネといじめっ子の間に飛び降りた。いじめっ子が後退し、男が少女を庇う形となる。

「君達はベルリネット嬢を負かしたいのだ。」

いくらいじめても輝きを失わない、宝石のような目が気に入らない。

その強さに忌々しさを感じ、同時に……

本質的な良さが失われない目をしている彼女を、見下しているという事実快感を覚
える」

「ち、ちげーしー！」

「だが、ベルリネッタ嬢の戦いとは、君達のいじめに耐え、その事実を隠すことだ。

誰にも心配されないことこそが彼女の勝利。

なればこそ、君達はベルリネッタ嬢を一度も負かしていない。いじめただけで、負け
ている」

「……！」

いじめっ子達が息を呑む。

彼が口にした理由こそ、彼女らがリンネを忌々しく思う理由の一つだ。

” いじめている自分達がリンネの眼中に入っていない” という事実には、彼女らも気付
いている。

リンネはいじめられているが、考えていることはいつもいじめの事実を隠すこと、家
族に自分の現状を知られないことに終始している。

いじめっ子へのことは最初から相手にしていない。

三人を現状そこまで恨んでない上に、”時間が経てば飽きるだろう”くらいにしか考えておらず、逆襲して痛い目を見せようという暗い情熱すら湧いていない。

そういう点を薄々感づいているからこそ、いじめっ子達はいじめをエスカレートさせてしまったのである。

「見たくはないか？」

君達に決定的に敗北し、敗者として君達を見上げるベルリネツタ嬢の姿を「

———！」

ゆえに、彼女らの心情を理解していた燕尾服仮面の誘導は、彼女らの心にカチリとはまった。

ぞくり、と三人の少女に暗い快感の予感が走る。

燕尾服仮面が助けに来てくれたのかと思ひ、黙って経過を見ていたリンネが、焦りを見せて男のマントを引っ張った。

「燕尾服仮面様……あなたは、どっちの味方なんですか？」

「自分の味方だと思つたのかね？ あいにく、違う。」

君の学園生活の平穩は、君自身の力で掴み取らなければならぬのだ」

そして、燕尾服仮面はリンネの手に運命を切り開く力を握らせる。

それを見たいいじめっ子の一人・サラが、驚愕と焦燥から声を張り上げた。

「む、あれは『ビーダマン』!」

「知っているのサラ!」

「あれは玩具からビー玉を発射するという画期的発想から生まれたホビー!」

1993年に世間に登場し、明治時代末期に普及したビー玉の新たな遊び方を生んだ
麒麟児!

ビー玉はそもそも平安時代に生まれたおはじきを祖に持つ由緒正しき遊具!

そこにボンバーマン等のゲームキャラという最新の要素を加えた新古の融合体!

1995年以降はコロコロとアニメで大人気シリーズが成功を収め、一気に普及!

一世を風靡し、歴史に名を刻んだ伝説的ホビー……知識人ならば必ず知っている代物

!」

「サラ! 詳しすぎて気持ち悪い!」

「気持ち悪い!」

高町なのはのレイジングハート、その待機状態が駄菓子屋で買える赤いビー玉みたいな
形であることから分かるが、ビーダマンと魔導師に密接な関係があることは周知の
事実だ。

発射されるビー玉は、魔導師の魔力弾にも例えられる。

燕尾服仮面は、ダンボールの中にぎっしり詰められたビーダマンを少女達の前に置い

た。

「これで決着を着けるがいい！ 正々堂々と！」

「え、この歳になった女子にビーダマンはちよつと……」

大人になつてもアニメ見てる気持ち悪い人じやあるまいし……」

「逃げるのか妖魔のいじめっ子！ 怖いのか！」

「上等よ野郎ぶつ殺してやるわ！」

いじめっ子の煽り耐性が高いわけがない。それは科学的に証明されている。

「せっかくだから私はこのコバルトブレードを選ぶわ」

「ええつと、じゃあ私はこのバトルフェニックスで」

ミッドグーグルという検索サイトでミッドググれば一発で出る（推奨）ような有名な機体を、二人はそれぞれ手に取った。

いじめっ子の一人は青い剣をモチーフにした機体。

リンネは燕尾服仮面から受け取った燃える不死鳥をモチーフにした機体。

燕尾服仮面は二人がビーダマンを手に取ったのを見て、指を鳴らす。

すると突如として体育館の中央に、卓球台に似たビーダマンの競技ステージが構築された。

（！……この高度な物質操作魔法……ただ者じゃない……いったい何者なの……？）

魔法の知識がある者なら誰にでも分かる、燕尾服仮面の魔法の技量。この男は何もかもが謎で不確かな男だが、魔法の腕だけは確かなようだ。

ホビー漫画にありがちな”突如出現する対戦場”を魔法一つで作れるのなら、それも当然か。

「ちなみにその機体は締め撃ちができるぞ、ベルリネッタ嬢」

「締め撃ち?」

「キャノンショットとも呼ばれるものさ。

人差し指で球を押さえ、親指で押し、デコピンの要領で撃つ。

その威力たるや、漫画の主人公が使えば金属が消滅するほどだ」

「しよ、消滅!」

「何、案ずることはない。君の可愛らしい腕では、そんな威力は出ないさ」

「か……可愛くはないです!」

いじめっ子といじめられっ子がステージの両端に着く。

その姿たるや、まるで古代ベルカの騎士が行う決闘のよう。

ここに来て初めて、一方的な加虐の関係が無い状態で二人が向き合うようになったのだと、燕尾服仮面以外の誰もが気付かない。

「ルールはクラナガン公式ルール! 三本勝負だ!」

この長方形の右端と左端がそれぞれの陣地！
そこに置かれたピンを全て倒した方の勝ち！

両者の最後のピンが同時に倒れたなら、決着はジャンケンで決めるものとする！」

審判は燕尾服仮面。クラナガン公式ルール、正式名称バトルモード0992（ゾイド感）。

今、いじめられっ子によるいじめっ子への反逆が始まった。

「ビー……ファイト！」

戦闘開始直後、ビーダマンにあまり馴染みのないいじめっ子は、とりあえず適当に思いつきでビーダマンを持った手を引く。そして、ビーダマンを突き出しながら発射した。

「このルールなら、こういうのもありでしょ！」

発射されたビー玉は大気との摩擦で自然発火。

リンネの陣地に置かれたプラスチックのピン——子供が飲み込む危険があるとPTAからクレームが来て生産中止、ネットで叩き売りされていたピン——の、1/3ほどが吹き飛ばされる。

いじめっ子がなんとなくで出したその技を見て、サラは叫んだ。

「あ、あれは！　ビーダマンの発射と同時に腕の力でビーダマンを前に突き出す技！」

ビー玉は指の力で発射するもの！　そこに腕の力を乗せる技！

腕の力が10、指の力が10、そのため生まれる力は100にもなる！

魔導資質持ちであれば、発射の際にビーダマンさえも大気摩擦で燃えるという！

故グランガイツチャンピオンの現役時代の炎熱必殺技、ブーストマグナム！　みたい
な技！」

「サラ、落ち着いて！」

そうこうしている内に、いじめっ子は第二射を発射。

リンネ陣地のピンの2／3が倒れ、残るは1／3。その間、リンネは手元のビーダマ
ンを不思議そうに眺めながら、一発も撃っていなかった。

「ベルリネッタ嬢！　どうした、押されているぞ！」

「あの、これどうやってビー玉を入れるんでしょうか？」

「ベルリネッタ嬢っ！」

そして、最後の1／3も倒される。

三本勝負の一本目は、いじめっ子の完封勝利に終わったようだ。

「よし、一本先取！」

「勝者は二回先取した方だぞ、いじめっ子よ」

「分かってるわよ！」

燕尾服仮面はいじめっ子に釘を刺しつつ、容姿から想像できないくらいに脳筋だったリンネにビーダマンの指導を始めた。

リンネは心優しいが、人や物に対する理解力が少し低いのもかもしれない。

「玉入れはこう、こう」

「はい！」

「締め撃ちはこう、こう」

「はい！ 燕尾服仮面様、ああいうこと言ってた割に親切に味方してくれますね」

「気のせいだ！」

味方する筋合いがないはずなのにいい人だなあ、とリンネは呑気に思っていた。

「締めて、狙いを定めて、トリガーを押す。締めて、狙いを定めて、トリガーを押す……」

「ちよつと教わったくらいで……」

貰われっ子でお嬢様気取ってるだけの奴に私が負けるわけないでしょ？ ベルリ

ネツタさん？」

「締めて、狙いを定めて、トリガーを押す。締めて、狙いを定めて、トリガーを押す……」

「……忘れないように頑張ってるのは分かったから！ こっちの話も聞きなさいよ！」

勉強していなかった不良学生が小テストの前に単語を覚えて、それを頭の中で何度も繰り返す悪あがきのごとく、リンネは教わったことを忘れないように何度も反芻してい

た。

第二戦。

「ビー、ファイト!」

開始。

いじめっ子はまたしてもビーダマンを持った手を引き、ブーストマグナム（仮）を構える。

「もつかいさっきの、三発一勝つ——」

「えいつ」

が。

それを撃つ前に、いじめっ子の横を『何か』が通った。

その『何か』がリンネの締め撃ち弾キャノンショットであると、誰か理解できただろうか。

放たれたいじめっ子のピンの右半分を衝撃波に巻き込んで倒し、作られたステージの壁をぶち壊し、なおも止まらずいじめっ子の後方の扉に命中。

体育館の鋼鉄製の両開きの扉、その右半分を吹き飛ばした。

「……えつ」

「あ、外れた。左左……えいつ」

左を狙ったのに右に飛んでしまった。締め撃ちではよくあることである。

リンネは今度はちゃんと狙って、可愛らしい声と共にピンの左半分へと締め撃ち。当然のように全てのピンを衝撃波だけでなぎ倒し、ステージをぶち抜き、いじめっ子の服をかすりながら後方の鋼鉄製の扉に直撃。

両開きの扉、その左側も吹っ飛んだ。

この瞬間、二本目の試合におけるリンネの勝利が決定した。

「Oh……」

ビーダマンが恐ろしいのか？ それもある。だが真に恐ろしいのは、リンネの腕力であった。

燕尾服仮面はちよつと冷や汗垂らしながら、壊れたステージを再構築する。

「三戦目ですね。負けませんよ」

「あ、あの、ちよつと……」

「えいつ」

リンネは「コツを掴んだ」的な得意げな顔をして、ちよつと浮かせたビーダマンを構え、斜め上から撃ち下ろすような角度で締め撃った。

いじめっ子の陣地のど真ん中にビー玉が着弾し、爆音に近い破碎音が鳴り響く。

衝撃波で全てのピンが倒される。

発射されたビー玉はステージの底を斜めにぶち抜いて、いじめっ子の股の間を抜けて

行った。

スカートにかすったビー玉の感触。

上着さえ揺らす衝撃波。

スカートの中に流れた風。

股の間を抜けて行ったビー玉が、あと少し上を通っていたら？ そう思った瞬間か
ら、いじめっ子の背筋にとてつもない悪寒が走る。

——と——トイレに行けない、体にされる——!

三本勝負、二勝一敗。

勝者、リンネ・ベルリネッタ。

「あ、ええつと、これで勝ちでしたっけ？ 燕尾服仮面様」

「凄いパワーじゃないか。尊敬するぞ、ゴリラネッタ嬢」

「ゴリラネッタ!？」

リンネは気付く。そして理解しない。

燕尾服仮面が自分を先程までと違う目で見ていることに気付くも、何故そんな目で見
られているのか理解できていないようだ。

「ゴリラネッタ……」

「リンネ・ゴリラネッタ……ひええ……」

「ゴリラ・ゴリラ……リンネ・リンネ……」

（あれ？　なんでだろう……）

この三人に悪口言われるのは初めてじゃないはずなのに、今日は特に胸が痛いよ）
なんと恐るべきパワーか。

燕尾服仮面が話に伝え聞く、第97管理外世界のジャツキー・チエンやランナー・チャ
ン並みに、同性同年代と比べて飛び抜けたパワーを持っているようだ。

「あつ、扉が！　ど、どうしよう、私が壊しちゃったの……!?!」

「今更!?!」

しかも天然。

天然にゴリラパワー。

この子がキレて拳を振るえば、いじめっ子達の命は風花のように吹き散らされ、輪廻
の輪に乗ってしまうに違いない。

「この壁は私がどうにかしよう。君達は帰りましたまえ」

「でも……」

「そろそろ朝のHRだ、と言ってもかね」

「あつ」

「あつ」

「あつ」

「あつ」

登校直後にビーダマンで遊んでいた少女達の顔色が、さっと変わる。

時計を見て、更に青くなる。

「やばいー!」

いじめっ子達は、リンネ以外に対する態度はそこそいい子ちゃんをやっている。遅刻なんて考えもしない。そのため、先生が来る前に席につこうと一目散に駆け出していた。

リンネも教室に戻ろうとするが、その前に振り向き、丁寧に深々と頭を下げる。

「あのー! ありがとうございます、燕尾服仮面様!」

「ふははははは! さらばだお嬢さん達!」

それは少女の方が去っていく時の台詞じゃなくて、少女達を置いてお前が去っていく時の台詞じゃないのか、とツツコむ者は誰も居ない。

リンネは教室に向かって走り、途中で廊下の窓からまた燕尾服仮面の姿を目にする。

彼は息を切らしながら、倒れた鋼鉄製の扉を必死に持ち上げ、扉を元の場所に戻して魔法で修理しようとしているようだった。

(燕尾服仮面……いったい何者なんだろう……?)

リンネはなんとか間に合ったようで、教室の自席に着く。

(あれ?)

そこで、隣の席の少年が居ないことに気付いた。

この時間に何があるんだろう、と思つてみると、教室の後ろの扉が開いてライ・ドローンが——汗塗れ、頬は上気、息も絶え絶え——現れた。

その数秒後に先生が教室に入つて来たことを考えると、リンネ以上にギリギリのタイミングで。

「ドローン君、どこに行つてたんですか？」

「……はあ、はあ……用事が……あつて……」

息を切らす少年を見て、この人がこんなに必死になつてるの初めて見たな、とリンネは思った。

正解は、越後製菓!

いじめを外野から見ている者は、見て見ぬふりをする子供もまた加害者であるという。

だが、それは違う。

いじめの傍観者は、『加害者にも被害者にもなりたくない』のだ。

当事者でもないのにいじめの関係者を総じて非難する“無関係な外野達”こそが、いじめの傍観者達が真になりたいものなのである。

加害者にも被害者にもなりたくない、責任の無い外野で居たい、面倒事に触れたくない。

大半の人はそういうものだ。

笑う人間と笑われる人間という構図が出来やすくなった現代ならばなおのこと。

学校は社会の縮図と言うが、こういった点にも社会の一面が凝縮されている。

とはいえ、一つ言えることがある。

いじめられている人間の大半は、自分をいじめている人間も、それを見ているだけの人間も、善人面でいじめを非難している遠く彼方の傍観者達も、等しく好きではないと

いうことだ。

いじめられている人間が被害者であることだけは、絶対に変わらない事実なのだから。

例外があるとするならば。

「あ、ドローン君。ポケットからビー玉が落ちましたよ」

「！」

「綺麗ですよね、ビー玉。最近私も見る機会があつて。

ドローン君も持ってたなんて面白い偶然……あれ、どうかしましたか？」

「ベルリネッタさんは鈍い人だと思って」

「う、時々言われます……」

いじめられている環境で、味方でなくてもいいから、敵にならないと信じられる人が一人居るか居ないか、という点がそれを決めるだろう。

「これ」

「？ プリントですね、これがどうし……進路希望調査!?! 提出日が明日!?!」

「いじめっ子がベルリネッタさんの分は隠して捨ててた」

「ああ、これよく見たらコピーした跡が……ありがとうございます！」

「別に。僕も捨てるの止めた正義漢ってわけでもないんだし」

ライ・ドローンはまた本を読み始める。

今日の本は『喧嘩の仲裁の仕方』というタイトルのようだ。

彼はいじめをおおっぴらに止めもしないし、いじめっ子を敵に回さないし、リンネの明確な味方にもならないし、リンネの私物が捨てられているのを見ても止めないし、自分からリンネに話しかけることもなく、リンネの友達というわけでもない。

この少年は、終始自分らしく生きているだけだった。

「……それでも、ありがとうございます」

「そう」

友達でもなく。敵でもなく。仲間でもなく。

”隣の席のクラスメイト”、そう表現するのが一番正しい、そんな関係。

それがこの二人の繋がりだった。

放課後に気が向いた時、話すこともある。けれど一緒に遊ぼうと誘うこともなく、同じ帰り道を帰ることもない。そんな距離感。

「あー、ベルリネッタさん何持って……ほげエフ、ビー玉ー」

そこに現れるいじめっ子三人衆。

されど彼女らは、リンネが持っていたビー玉を見るだけで顔色を変えた。

さながら、高町なのはを前にした戦闘機人クアットロのように。

「捨てろおツ！」

「あつ！」

いじめっ子の一人がビー玉を奪い取り、ゴミ箱にシユウウツ！ 超！ エキサイティン！する。人の物を奪ってゴミ箱に捨てるなど、なんと典型的ないじめ行為だろうか。

その表情がライオンに噛みつかれたシマウマを思わせる、死を前にして必死に足掻く生物のそれであることに目を瞑れば、外道畜生極まりない行為である。

（彼女のお守りにはならなかったか。ビー玉）

少年は捨てられたビー玉を見て、それが牽制にならなかったことを残念がった。

対し、リンネはいじめに巻き込まないため少年に話しかけられず、同時に”凄く謝りたい”という感情の奔流に、胸を掻き毟りたくなる苦悩を感じさせられていた。

「付いて来てくれるわよね？」

「……は、い」

いじめっ子達は恐怖を乗り越える勇気を無駄に見せ、リンネを連れて行く。

放課後の教室に、それを止める者は居ない。

ただ、リンネが教室を出ていつてから数分後、本を閉じておもむろに立ち上がったライと。

それを見て、無言で教室の扉を開けてやったクラスメイトが居たことだけは明言しておこう。

ライとクラスメイトは互いに頭を下げ、無言のまま離れていった。

ここは特別教室。

中に入って鍵を閉めれば、この学校の授業形態の問題から、気付く者はほぼ居ない。

三人の内二人がリンネを——ビビりながら——抑え込みにかかり、残る一人がリンネの付けていた宝石付きのタイピンを奪い取る。

その瞬間、リンネは血相変えて暴れ始めた。

二人がリンネの腕関節を抑えているはずなのに、リンネが腕を動かすたびに二人の足がふわっと浮いて、小刻みに床から離れる。

「返してー!」

「なあにこれ、センスないタイピン!」

こんなの捨てちゃった方がいいんじゃない？ 私が代わりに捨てておいてあげようか？」

「やめて！」

「あ、ちよ、ちよつとタイム。それ以上近付かないで、距離近い」

二人分の体重を引きずって接近してくるリンネに、タイピンを持ついじめっ子はお出さなくなった短い悲鳴を嘯み殺し、素早く後退した。

このタイピン・スクーデリアは、“ベルリネッタの家族の繋がり”の象徴である。

リンネは養子だ。家族と血の繋がりを持っていない。

ゆえに、母・ローリーが「お友達がたくさん出来ますように」と願いを込めて娘にプレゼントしてくれたこれは、少女にとって血の繋がりに等しい大切な繋がりなのだ。

リンネの祖父が、妻に愛の証として一つの宝石を贈った。

夫から貰った愛の証を、妻は娘に二人分の愛の証として贈った。

夫が妻に向けた愛、母が娘に向けた愛、その両方が込められたそれを、祖父の娘であるローリーがリンネに贈る。それは、義母が養子に向ける愛を証明する行為。

同時に、“本当の家族として愛します”という、母ローリーの意味表示でもあった。

スクーデリアには、『家族の愛』が込められている。

なればこそ、リンネはこれを奪われれば冷静でいられない。

このいじめっ子達なら、何をしても不思議ではないからだ。

スクーデリアを絶対に傷付けない、絶対に汚さない、と祖父に誓ったリンネにとって、これを汚されることは死ぬよりも辛いことである。

「返して!」

「かーえーしーまーせーんー」

ゆえに、リンネの危機に彼は駆けつける。

どこからともなくバラが飛んで来て、いじめっ子の手元のスクーデリアを奪い取ったのだ。

「このバラは……燕尾服仮面様!」

バラは空中でバラの代名詞とも言える飛行機動・インメルマンターンを決め、スクーデリアごとバラを投げた者の手元に戻る。

バラを目で追う少女達。

そして彼女達は、教卓の上に立つ白い仮面と黒い燕尾服の男を目にした。

「意地になり屈服させようと気張る矮小な妖魔、いじめっ子どもよ。この私が許さん」
「教卓の上に靴を履いて立つなんて……教師を、いえ、神をも恐れぬ所業……!」

燕尾服仮面は、スクーデリアを握って跳躍。

「とぅっ!」

怪我をしないよう教壇の前にゆったり着地し、足をぐつと曲げて全身で衝撃を殺しつつ、つかつかと少女達の前に歩み寄る。

「ふっ……元通りとは情けない。」

ベルリネット嬢を敗者の恥辱に突き落とすのではなかったのかな？」

「へん、よく考えたら私達に玩具での勝負を受ける必要なんて無いし？」

「ほう」

「うやむやになってたけど、あんたは要するにそこの子を守りたいんでしょ？」

ベルリネットさんは私達がこうしてる方が困るんでしょ？」

勝負受けても、私達には勝利の実感くらいしか得がないしー？」

「成程、得があれば勝負を受けるのだな。予想通りだ」

「えっ?」

燕尾服仮面は不敵に笑い、懐から三枚の紙を取り出す。

「商店街の引換券だ。額は見ての通り」

「——!」

日本で言うところの、一枚五千円相当の商品引換券。商店街にある店ならばどこでも使用可能でお釣りも貰えるという代物。

購入するなら、パフェにも本にも服にもゲームにも使える。

一枚手に入るだけでも小学生は大喜びし、小学生が自分の財布で三枚用意するのであれば、血を吐くような苦痛を伴う代物であった。

「欲しくはないかね?」

「ほ、欲しい……!」

もはやいじめっ子達はニンジンを目の前にぶら下げられた馬、アルトリアを見せられた武内崇、道端に落ちていたエロ本を発見した男子中学生に等しい。それしか見ていない、ということだ。

「ベルリネッタ嬢に君達が勝てたなら、一人に一枚づつやろう」

「本当!」

「だが負けたなら、一週間はベルリネッタ嬢に関わらないと誓約してもらおう」

「はあ? そんな約束私達が守るわけ……」

「嫌がらせを止めたなら、またこの引換券を巡って勝負する機会が訪れるかもしれんぞ。何もずつと関わるなど言っているわけではない。」

君達が勝つまで関わりを断っておけばいい。

ただし、約束を破って嫌がらせを行ったなら、もう二度と機会は訪れないと思いたまえ」

「……っ」

小学生の幼い心に対しては強烈すぎる、五千円という名の暴力。

金の力は偉大だ。金で買えない物もあるが、金で買える物の方が圧倒的に多い。

これはリンネの平穩という金で買えないものを、商品券という金で買える物を餌にして勝ち取るうという交渉であり、取り引きである。

良心や罪悪感では動かなかつたいたいじめっ子達の心は、金の力で派手に揺らがされていった。

揺れるいじめっ子をよそに、燕尾服仮面にスクーデリアを手渡されたリンネが不思議そうに、堂々と味方ポジションについている彼に話しかける。

「燕尾服仮面様、最初に出て来た時の中立を気取っていた姿はどこに……」

「黙れ。建前は捨てたのだ。」

それに、君の平穩は君が勝ち取らなければならないというのは変わらない

「リンネの天然と鈍感っぷりも筋金入りだが、燕尾服仮面のスタンスも筋金入りだ。彼女の平穩は彼女の手で勝ち取らなければならない、という主張だけは揺らがせていない。」

「……よし、分かった、乗るよ。その提案」

「え、乗っちゃうの？ 確かに欲しいけどさ……」

私達、燕尾服仮面の思い通りにはならない、って話し合って決めたばっかじゃない？」

「あんた頭スカリエツテイなの?」

「ぬわんですつてえ!」

『お前頭スカリエツテイなの?』

これはここ数年、ミッド等の若者達の間で流行している煽り文句だ。

意味としては「お前頭おかしいんじゃないの?」だが、ミッドを中心とする管理世界の者達に対して使えば、この煽りは最大の侮辱として機能する。

ソーシヤル・ネットワーキング・サービス・ミクシ……MIDDO^{ドゥ}を中心とする各種NSにおいては、日常的に使われている煽りの言葉である。

「よく考えなさいよ。私達が負けても何も損しないのは変わらないのよ」

「……あ」

「私達は挑戦でも敗北でも何も失わない。」

でも勝利すればマネーゲット。

ザギン（ミッドの地名）でシースー（ミッドの食べ物）も食べ放題よ!」

「ひゅー!」

いじめっ子達が全員乗り気になったのを確認し、燕尾服仮面は指を鳴らした。

「よろしい。ならば今日の種目はこれだ!」

すると、どこからともなく平たいすり鉢状のスタジアムと、せんべいをまとめて買う

と容れ物として付いて来る金属箱——子供が玩具入れとかに使ってそう——が現れる。

「あれは、『ベイブレード』！」

「知っているのサラ！」

「あれはベイゴマ文化をスタイリッシュに進化させた時代の革命児！」

コマとは地球における人類史の象徴！

約4000年前のエジプトには既に原型があり、日本では平安時代に普及！

大正時代にベイゴマへと進化したものが一般にも普及！

1999年にベイブレードへと進化、2001年にアニメとマンガが大ヒット！

その回転が生む真空状態の圧倒的破壊空間はまさに歯車の砂嵐の小宇宙！

Mr. ティミルの魔法操作ベイによる世界大会五連覇は未だに記憶に新しいわ！」

「サラ！ 詳しすぎて気持ち悪い！」

「そこまで聞いてない！」

四人の少女が金属箱の中のベイブレードを漁り、その背後から燕尾服仮面が覗き込み、ガチャガチャ音を立てながら使用機を選び始める。

「あ、あたしこのドラグーンFつてのにする。この軸、なんかロマンがあるね」

「ベルリネッタ嬢はその辺から選ぶとよい。」

ゴリタネッタ嬢が攻撃型を使えば、そのパワーですぐにリングアウトしてしまうだろ

う」

「そ、その呼び方はやめてください! ではこの、ドラシエルSで……」

いじめっ子の一人は軸が大きなゴムで出来ていて、ぎゅいんぎゅいん動き回るロマンの塊な攻撃タイプ。リンネは重量のある防衛タイプを選択した。

「え、ベイブレードってラジコンもあんの?」

「ああ、あるとも。デカいがちゃんと使えるぞ」

「あ、じゃあそれで」

「あ、私もそれで」

(躊躇なく邪道に行くなこのいじめっ子ども……)

残り二人のいじめっ子が迷いなく邪道に走ったのを見て、燕尾服仮面も思わず真顔になっってしまう。

「ベルリネッタ嬢。

ドラグーン、ドランザー、ドラシエル、ドライガー……

色々とビットチップを用意した。

そして、君に似合うビットチップを一つ選んでおいた。ドラえもんだ」

「わ、かわいい」

ドラグーン、ドランザー、ドラシエル、ドライガーのビットチップが脇にどけられ、手

製つばいドラえもんチップがドラシエルSに取り付けられる。

「ベルリネツタ嬢、ここはこう……」

ああ、それだと紐ワインダーを引く時に手を傷付けてしまうぞ」

「えっ？ あっ……た、確かに」

「何故君はちよくちよくそんなに不器用なんだ……？」

仕方ない、シューターにカスタマイズグリップを付けてやろう」

「わあっ、持ちやすい！ ありがとうございます、燕尾服仮面様！」

「やだ、なにそれかっこいい……」

「ちよつと！ 私達にもよこしなさいよ！」

「そうよそうよ！」

「……人数分あるから、落ち着きたまえ」

四人全員に行き渡らせて、燕尾服仮面は咳払い一つ。そして、開始の合図を送った。

「ルールはクラナガン公式ルール。」

位置について、構えて……ゴー、シュート！」

リンネといじめっ子が一対一で向き合ったのを見て、燕尾服仮面は始めさせた。

「!？」

だがいじめっ子達は、開始の合図と同時に三人同時にベイを発射。

三つの独楽^{ペイ}にて、リンネのベイブレードを囲んで叩き始める。

騙し討ちに近い、リンチ作戦だ。

「なんと卑劣な……ブリーダーの魂すら失ったか!」

「最初から持つてないわよそんなもの!」

「とうかなんで持つていて当然のように言ってるの!」

「卑怯もラッキョウもお金も大好物よ! 勝てばいいんでしょ勝てば!」

防御型のリンネのベイを、三つのベイが囲んで叩く。

パワー溢れるリンネに防御の強さを加え、隙の無い強さを構築しようとした燕尾服仮面の判断は極めて正しかったが……この数が相手では、意味が無い。

「卑怯者め……ベルリネッタ嬢! 必ず勝つのだ! 頑張れ!」

「燕尾服仮面様! ベイを発射してからそんなことを言われてもどうしようもありません!」

「そうだな! その通りだ! 正論だなベルリネッタ嬢!」

ラジコンでちまちま削ってくる二人に、ドラグリーンFで豪快に削ってくる一人。

リンネ、絶体絶命。

だが燕尾服仮面に応援されると、不思議と敗北を受け入れる気にはなれなかった。

この子はこの子で、結構責任感の強い子だったからだ。

リンネはドラシエル（ドラえもん）に向けて手を突き出し、無駄な思念を送る。

「なんか、なんか出る！ 私の中の隠されたパワーとかそういうの！ えいやっ！」

「あははは、バカじゃないのベルリネッタさん！ それで何か出るわけじゃないじゃない！」
そして、そんなことをやっていたら。

リンネのベイを中心に、全てのベイが発火した。

「……何か出たー!?」

突然の炎に誰もが驚愕を隠せない。

びっくりしてる内になんやかんや炎で上昇気流が生まれ、なんやかんやでリンネ以外のベイが吹き飛ばされる。

呆気にとられる五人をよそに、落下していくいじめっ子達のベイブレードが、勝者と敗者を決定していた。

「あれは……あれは摩擦熱！　そして火災旋風！」

「知っているのサラ!?!」

「このスタジアムもベイも燃えにくい耐熱素材で出来ている！」

にも関わらず摩擦熱で発火した！

ならばそれはゴリラネッタパワーによるものであることに間違い無し！

その熱が全てのベイを発火させ、竜巻を発生させた！

火災旋風とは災害現象!

震災時に発生することが予期されておる、恐るべき殺人災害!

炎の竜巻であり、合わさると足し算でなく乗算で規模が拡大するという!

発火したベイは四つ、一つの炎の竜巻が100であると仮定する!

$100 \times 100 \times 100 \times 100 \parallel$ 一億で、バツファローマン! お前を上回る一億

パワーだッー!

「サラ! どこでそんなことを学んだのサラ!」

「バツファローマンって誰?!」

あれが火災旋風、つまり炎の竜巻であるのなら、その中心は台風の目に近い。中心に居たリンネのベイだけが無事だったのは当然と言えよう。

リンネの恐るべきパワーが生み出した炎が、必然の勝利を引き寄せたのだ。

「え、ちよつと待って。今燃えにくい素材の摩擦だけであの炎の竜巻作ったってこと?」「せやで」

リンネを除いた四人の思考がシンクロする。

思い返されるのは、中学校の歴史授業で見たワンシーン。

大昔の人間、子供達からすれば原始人にしか見えない毛むくじやらの人達が、木と木を擦り合わせて火を起こしていた姿だった。

原始人が火を起こす姿と、勝者として立つリンネの姿が、重なる。

「原始人……」

「原始人だわ……」

「原始人の力にこの怠惰な社会で墮落した軟弱な現代人の私達が勝てるわけがなかったのよ……」

「やめてください！」

「ベルリネツタ嬢。原始人にもメスは居たのだ、恥じることはない」

「あなたはフォローしたいのか、貶めたいのかどっちなんですか!？」

「純粋な力勝負でなければ、三対一なら、勝てると思っていたのに。」

「そう思ってしまうからこそ、いじめっ子達の悔しさは大きい。」

「いじめっ子達は捨て台詞を残して、三人揃って逃げ出した。」

「「これで勝ったと思うなよーっ!」」

走り去る三人を見て、リンネはほっと一息つき、燕尾服仮面に礼を言おうとして、彼の背後に見える時計の時刻に驚愕してしまう。

「あ、いけない!」

「むっ!」

「ありがとうございます、燕尾服仮面様! 私急ぐので、さようなら!」

駆け出すリンネ。彼女には急がなければならぬ理由があった。

(もうこんな時間! あの人三人に絡まれちゃったから、こんな時間に……)

いつものいじめが行われていたなら、もっと遅くなっていただろう。

燕尾服仮面のおかげで、ギリギリ間に合う時間にいじめが終わったのはいいが、走らなければ間に合いそうにもなかった。

今日、リンネの祖父が病院の検査を終え、ある時間に帰って来る予定になっていた。

リンネはその前に、祖父と約束していたのだ。

”この時間には帰るから、今日はずっと一緒にお話しよう”と。

遅刻すれば、リンネは約束を破ってしまう。

祖父が笑って許してくれるとしても、約束を破ってしまうことに変わりはない。

(おじいちゃんとの約束に遅れちゃうー)

リンネは律儀で心優しい。だが、いつもいつも致命的なレベルで運が悪かった。

「あ、今日私掃除当番……」

教室に辿り着いてようやく、リンネは自分が今日の教室掃除当番だったことを思い出す。

彼女らの教室はクラスの人間が持ち回りで掃除を担当し、放課後に掃除することになっているのだ。リンネは運悪く、よりもよって今日、その当番だったのである。

祖父を優先するか。

決められた責務を優先するか。

どっちも蔑ろに出来ない生真面目さが、リンネの足を止めてしまう。

フリーズしたリンネ。

そんな彼女の横を通り、クラスメイトの掃除当番表をきっちり暗記していた少年が、掃除用具入れを無表情のまま開けていた。

「僕がやっつく」

「！ ドローン君!?!」

「行けばいい」

「……でも……悪いです……」

「その自己満足と、今急いでた理由、どっちが大事?」

「っ」

「行きなよ」

リンネは少しだけ迷い、決意を固め、鞆を持って少年に深く深く頭を下げる。

「ありがとうございます！ また明日！ 明日お礼します！」

そして、迎える車が居る場所まで、全力で帰り道を走った。

リンネが消えたのを見届けてから、少年は一人で教室を綺麗にし始める。

後でリンネがとやかに言われないよう、徹底して丁寧な。

少年の要領の悪さがそのまま表出しているかのようには、掃除はそんなに手早くもな

く。
厚い雲が傾いた陽に重なって、教室がそこそこ薄暗くなってくる。

「……」

今日は気温も低かったため、教室はそこそこ暗くて寒い。

そんな教室で、手伝ってくれる友達も居ないライは、生真面目に掃除に打ち込んでいた。

「……寂し……」

ポロツとこぼれた本音の言葉を、首を振って否定して、

リンネ・ベルリネットは主人公気質だ。優しく鈍感、好かれやすくて嫌われやすい。

そして、ライ・ドローンはヒロイン気質。献身こそが、彼の本質だった。

コウシワア、ガイコクジン。レッスンワア、シヨウニンズ
ウ。ノヴァツ！（駅前留学）

朝登校してすぐに、教室に辿り着くよりも前に、リンネは倉庫の中に連れ込まれてい
た。

いじめられないように遅めに登校したリンネも賢かったが、その裏をかき、リンネを
いじめてもバレない場所を学校に無数に用意している有能ないじめっ子には敵わない。

「その鞆貸しなさいよー！」

「よー」

「このペンであたし達が最高にカッコいいデザインにしてあげるからさー！」

ペンを持ったいじめっ子達が迫り来る。

彼女らはリンネが体育の時間で教室を離れた隙に、リンネの英和辞典えいわを盗み出し、1
983年に近鉄バファローズに入団・その後移籍を繰り返してから2003年に引退し
た野球選手『光山英和』について記された辞典、英和辞典ひてかとすり替えるといった、悪質
ないじめを半年以上繰り返していた。

いじめっ子の巧妙な罠にリンネは英語の授業で追い詰められるが、隣の席の少年に見

せてもらうことでなんとか乗り越えていた。

今日もそういういいじめが行われていた。

なのだが、リンネの表情に悲壮さはない。緊張感すら無い。

彼女は倉庫の窓から空を見上げて、朝の日差しに心地よさそうに目を細めていた。

(今日はいい天気で気持ちいいなあ)

彼女は信じている。

あの男が来ることを。あの男が助けてくれることを。この危機が終わることを。

誰かに触られるだけで泣き叫ぶ赤ん坊が、親に抱き上げられるだけで泣き止む現象の

ごとく、『信頼』が『安心』を生み出している。

「きよ、今日はあいつ居ないわよね……?」

「……」

「け、警戒するに越したことはないし。燕尾服仮面様、どっからでも出て来るし……」

同様に、いじめっ子達もひん曲がった信頼をあの男に向けていた。

” 奴は必ず邪魔しに来る ” という『信頼』が、いじめっ子に『不安』を与えている。

それゆえに、彼は期待に応えて現れた。

「よく分かっているじゃあないか」

「!?!」

「!？」

「この声は……燕尾服仮面様！」

聞き慣れた声。

どこだ、どこだ、と視線を走らせるいじめっ子。

狼狽するいじめっ子二人の目の前で、サラが自分の顔に手をかけ、被せられた偽物の顔をひっぺがすと、その下から燕尾服仮面の仮面と顔が現れた。

「出たあああああっ!？」

「来たあああああっ!？」

ホラー映画で幽霊に襲われた仲間を見捨てて逃げ、再会して『助かったのね!』と言いつつ仲間に近付いたら、その仲間まで亡霊になっていて襲われたでござる現象。それに匹敵する衝撃が二人を襲う!

「薄々感づいていただろう。」

燕尾服仮面の姿は変身魔法で作ったもの! ならば他の姿にもなれる!
罪なき少女の心を踏み躪ろうとする魔物、いじめっ子どもよ。

小賢しくなってきた貴様らの行き先を特定するため、最初から紛れ込んでいたのだ!？」

「人間とメタモンのハーフか何か……?」

変身魔法と物質操作魔法こそ燕尾服仮面の真骨頂。

燕尾服仮面はいじめっ子達がビビって落としたりしたペンを拾い、倉庫から華麗に脱出する。

「ふはははは! 今日時間的にもこれで十分! さらにばだ!」

燕尾服仮面が消え、その数秒後に倉庫にサラが現れた。

「今ここに私の顔をした奴が来なかった!」

「さ、サラ!? い、居たけど……」

「バッカモン! そいつが燕尾服仮面様よ! 追って!」

「追って……え?」

「よりもよって! 一限で出さないといけない宿題! 持ってきたのよ!」

「フアツ!」

一限の教師は厳しいこととすぐ怒鳴ることとで有名だった。

燕尾服仮面の後を追うサラと、友人のピンチを救うため共に行く二人のいじめっ子。

悪魔にだつて友情はある。ならばいじめっ子にないはずがない。

問題なのは、いじめっ子にとってリンネが友達ではないということなのだから。

今日こそはしっかりお礼を! と思っていたリンネだったが、燕尾服仮面の突然の登

場・逃走に礼を言えなかったようで、しょんぼりしている。しょんぼりリンネ。

すると、しょんぼりリンネの耳に予鈴の鐘の音が届いてきた。

「ああ、時間的に十分って、そういう……」

あの三人の位置次第じゃ遅刻確定になるのかもしれない、とリンネは思いつつ、教室に帰還した。

案の定、リンネは朝のHRに間に合ったが、宿題を手にしていじめっ子達が戻って来たのは、一限が始まってから少し経った頃だった。当然怒られている。

ただ、意外なことが一つだけ。

何故か、ライ・ドローンがいじめっ子よりも遅刻して来て、先生に怒られていたのがある。

リンネは珍しいものを見たような顔で、一限後の休み時間にライに話しかけた。

「珍しいですね、ドローン君が遅刻するなんて。」

私、ドローン君がこのクラスで一番真面目で遅刻しそうにない人だと思ってたのに」

「……授業に遅れないことは大事。大事なことは蔑ろにしてはいけない」

リンネの言葉は鈍感だが正解だ。

ライはこのクラスで一番真面目で、反面要領がよくないというか、不器用なところがあつた。

遅刻など、彼が心底嫌うものの一つだろう。

「でも、大事なことは一つじゃない。僕は優先順位を間違えない人間で居たい」
「……驚きました。意外と熱いところもあるんですね」

リンネが驚きを顔に浮かべて、少年が誤魔化すように本を開く。

本のタイトルは『背が伸びる方法』。

親近感を抱きながら、俗っぽいところもあるんだなあ、とリンネは思った。

放課後。

校舎裏に呼び出されたリンネは、二階のペランダの手すりの上に立ち、地面に立つ自分を見下ろすいじめっ子三人を見上げていた。

「待っていたわ、ベルリネットさん」

「燕尾服仮面様の真似ですか？」

一度やってみたかったですか？ 気持ちは分かりますけど……」

「ちやうわい！ 私達が上、あんたが下！ そういう事実を再認識させてやってんのよ

！」

三人が二階から飛び降り、いじめ実行まであと僅か。だが、リンネが安心しきつてしまいうくらいには、このタイミングで間に合わせるといふ実績を彼は積み上げてきた。

「待てい！」

「この声は！ 燕尾服仮面様！」

またしてもいじめを中断させる、介入者の男の声。

どこだどこだと見渡すも、いじめっ子達は彼の姿を見つけられない。

だがやがて、彼女らは宙に浮かぶ巨大な魔力製の鏡と、そこに映る屋上の光景を見た。

「いったいどこに……ハッ！」

「屋上！ 給水タンクの上！」

「バカな……奴は私達の遙か上を行っているとでもいうの……!?」

リンネやいじめっ子達の位置からでは角度的に見えない高み、屋上の給水タンクの上には彼は居た。高い所上がったのはいいものの、少女達からは角度的に見えないことをうっかり失念していたのだろう。

ゆえに自分で巨大な鏡を作り、反射を利用して少女達に自分の姿を見せたのだ。

「とぅっ」

燕尾服仮面は跳躍し、宙に浮いていた鏡にぶら下がって、スライスされたみかんの間

で腰を振るサザエさんの猫のような格好で降りて来る。

「二階の手すりの上に立ったせいでも下からパンツ丸見え。」

その事実をベルリネッタ嬢の優しさに隠されていた卑猥な妖魔、いじめっ子共よ聞くがいい」

「!?!」

「貴様らの知能が足りていなかったとしても、この燕尾服仮面は容赦せん!」

「よッ! 余計なお世話よ!」

ぶら下がる筋力が足らず、腕がプルプルしてきたタイミングで、燕尾服仮面は鏡を離してシユタつと着地。

「本日の種目はこれだ」

ベイブレードのスタジアムより広く、完全に平面かつ楕円の形をしているスタジアムと、『武器と車の中間』と表現すべきホビーの数々を取り出し、彼女らに見せた。

「あれは、『クラッッシュギア』!」

「サラ! 聞き流してあげる!」

「クラッッシュギア!」

当時制作側で流行っていた『電池で走る玩具』の流れで作られた物の一つ!

そして数少ないヒット作の一つ! 特にアニメは盛況だったと聞くわ!

その最たる特徴はモーターがホイールと共に付属武器を動かすこと！
車を『速さを競わせる』のではなく！

『敵を倒すという勝利条件で戦わせる』という画期的発想！

それは黄昏よりも昏きもの、血の流れより紅きもの、時の流れに埋もれし偉大なるホビー！」

「今日も気持ち悪い！」

「サラ、気持ち悪い！」

共通パーツ・量産パーツの部分がパッケージより数段落ちるシヨボさなのが気になるが、全体的にカッコイイ車のホビー。

それが、燕尾服仮面が持つて来た今日の勝負内容だった。

燕尾服仮面は得意気に、今日の勝負とは関係の無い他の車ホビーを取り出して、リッネに見せ始める。

「ちなみにこれがミニ四駆。これがカブトボーク。これがダンガンだ、ベルリネッタ嬢」
「え、全部同じじゃないんですか？ 車の玩具ってことで……」

「違うのだ！」

「はあ？」といった顔をして、いじめっ子の一人がチョコロQとダンガンを左右の手で掴み、食ってかかる。

「これがミニ四駆！　これがクラッシュシユギア！

そこになんの違いもありやしないうでしようが！」

「違うのだ！」

車系の玩具なんて皆同じようなもんじやないの、という女子の意見が心に刺さる。

「男の人ってなんでそんなに違いにこだわるの？　ロボだつて全部ガンダムでいいじゃん」

「違うのだ！」

いじめっ子にはリンネの気持ちも分からない。燕尾服仮面の気持ちも分からない。毎日鉄板の上で焼かれる日々がやんなつちやつて海に逃げ出したたい焼きの気持ちも分からない。

「ええい、勝負を始めるぞ！」

ルールは時空管理局公式ルール！

同時に投げて、相手を引っくり返すか場外に押し出したら勝ち！

投げ方は自由！　ギアファイト・セットアップ！　レディ——」

いじめっ子の一人が、鎧輝という名のギアを手取る。

アニメ設定だとこのギアとその周辺機器などのために、10年の時間と800億の資金をかけたというホビー界特有の狂気が垣間見える機体だ。

リンネはガルダフェニックス。主人公機でフェニックス。これは強い。児童誌や少年誌で出る不死鳥モチーフの七割くらいはデタラメに強いのだ。

双方が構えた段階で、いじめっ子はニヤリと笑った。

(流石に電池で動く車同士をぶつける玩具で、あんたの馬鹿力は活かせないでしょ！)

クラッシュギアは自分の力で走る玩具だ。単三電池二本分の力で戦う以上、リンネの腕力は活かせない。そう見込んで勝利を確信した笑みだった。

リンネと力で戦えば、その先に待つのはシヌネ・ベルリネットAEND。少なくとも、いじめっ子はそう確信していた。

「——ゴ——」

いじめっ子はじつくりと攻めるべく、手元に落とすようにクラッシュギアを投げ——

——自分のギアを粉碎する、リンネのギアの姿を目にした。

「えっ」「えっ」

「えっ」「えっ」

野球ボールみたいなノリでギアを投げたリンネに、彼女が投げたギアのスピードと威力に、それがもたらした破壊に、四人が絶句する。

周りが絶句しているのを見て初めて、リンネは自分の行動が何か間違ってるんじゃないかと思ひ始め、うろたえ始めた。

「え、あ、すみません……」

クラッシュギアという名前なので、クラッシュユすれば相手を壊せば勝ちなのかと……」

「無知なりに自分で考えて察しようとするその姿勢、尊敬に値する。」

「だがあえて言おう。そんな遊び方は誰も想定していない。というか、思ってもできない」

「あうっ」

リンネの投げたギアはいじめっ子のギアを粉碎し、フィールドに突き刺さっていた。シャイニングギアブレイカーか何かだろうか。

その威力たるや、剛力乙女の異名を彼女に付けたくなるほどだ。リンネの容姿とパワーがあれば、どんなバトル漫画を実写化しても、ヒロイン役は彼女に振っておけばいいと確信できる。

「一対一ならベルリの女に負けはないんじゃないかしら……あはは……」

「し、しっかり!」

「気を強く持つて!」

心的ショックでいじめっ子の意識は昇天しかけたが、雲の上のベルカの騎士さんに「ベルカの格言バカにしてんのか」と蹴り返され、元の体に数秒で帰還する。

はっと気が付き、意識が戻るやいなや、いじめっ子はリンネにキレた。

「相手の頭を狙って投げるのが好きな160km/h野球投手でもあんたよりは怖くないわー!」

「ボーリングで勝つために相手の頭に球叩きつけて

『スピア! ストライク! いや、フューチャーストライク!』

とか嬉々として叫ぶような人でもベルリネットさんよりかは怖くない!」

「サッカーで友達に勝つために

『ボールは友達。だから友達の君はボールなんだ!』

ってハイキックかますような人が居たとしても、まだそっちの方が怖くない!」

「かつてないくらい酷い言葉やぶつけないで下さい!」

「これが自覚のあるいじめっ子というものだ、ベルリネット嬢。

自覚のないいじめっ子は自分がいじめている事実には気が付きもしない。

だが、罪悪感を覚えてしまういじめっ子は、逆襲と復讐をふとした時に恐れるのだよ。

まあ小さな罪悪感や良心の疼き程度なら、簡単に無視されてしまうのがいじめである

のだが」

「私は、別に……」

「手始めに熱湯プールに落とすくらいは逆襲なら許されると私は思う」

「いや、あの、本当にいいですからそういうの」

管理局公式ルールで許された相手のギアへの投擲が導いた破壊勝利。

今日も結果的には彼女の勝ちか、と燕尾服仮面がほっと一息ついた時。

彼の脳裏に電流走る。

「!...この気配...何奴!」

気配は校門前に止められた車の中から現れ、門の受付と一言二言交わすなりすぐさま、迷いなく校舎裏へと歩いて来る。

そして、娘を迎えに来たその男は、興奮冷めやらぬその戦場に現れた。

「話には聞いていた。君が燕尾服仮面か」

「お父さん!」

「お父さんですって!?!」

突然のフアーザー・カム・インに皆が驚く中、リンネの父の目が光る。

服飾メーカー・ベルリネッタブランドと言えば、極めて優秀な経営者一族と層の厚い優秀な社員で構成された、次元世界指折りの服飾メーカーだ。

この男は、そのブランドの社長なのである。

その規模を的確に表現する言葉を選ぶなら、「ステイブ・ジョブスとビル・ゲイツをポタラで合体させ生まれた戦士・ブスゲイに匹敵する」と言わざるを得ない。

ブスもゲイも別に価値があるわけではないが、ブスゲイと繋げて言えばその圧倒的資

産力がしつかりと伝わるだろう。リンネの父の凄さを表すのなら、ブスゲイという言葉以外にありえない。

「ただ……少し、状況が読めないな」

ブスゲイ級の男の眼は、それが人であっても物であっても全てを見抜いているかのようだ。

いじめっ子を見れば、いじめの事実が見抜かれているような気すらする。

燕尾服仮面を見れば、その正体さえ見抜かれているような気がする。

無論、見ただけで何もかもを理解できるわけではない。

だが、リンネの父の眼には、全てを見抜いているかのような光が常に煌めいていた。

「読む必要など無いでしょう。」

子供の世界の問題は子供が片付ける。

あくまで基本ですが、それがルールです。

大人が出て来るのは本当に最後の手段。

でなければ、その子は学校で自分の居場所を得ることはできない」

「かもしれないな。だが、君は……」

ダン・ベルリネッタは燕尾服仮面を凝視する。

燕尾服仮面の正体と目的、変身魔法のその奥にあるもの、仮面に隠されたもの全てを

見通すかのような眼だ。

リンネの父は、リンネが学校で何か問題を抱えていることを薄々察していた。察していたのに踏み込めなかったのは、”義理の父に心の中に踏み込まれるのは嫌なんじゃないか”という娘への気遣いであり、”娘が打ち明けてくれた時にこそ、全力で行動する”という愛があつたからだ。

最近のリンネは、食事の時間に燕尾服仮面のことを話すことが多い。

その時のリンネは、血の繋がらない父の目から見ても楽しそうだった。

暗い顔をしていることが少なくなった。

なればこそ、ダン・ベルリネットが選ぶべき選択肢は一つ。

「いや、問題の焦点はそこか。」

リンネの信を得る君が何者か、という話だ」

ダンが懐から長方形の電子端末を取り出し構える。

画面の中で吠えるのは、鉄獣『メタルガルルモン』。

その真剣な表情に、燕尾服仮面も真摯に応えた。

取り出したるは、竜騎士『ウォーグレイモン』が映し出された電子端末。

「ほう」

「お初にお目にかかります。ダン・ベルリネット殿」

そして、サラは興奮した。

「あれは『デジモン』！」

『お前らよくたまごっちに怒られないと思ったな』

と言われ当時爆発的に増えていたたまごっちの不認知チルドレンの一角！

アニメシリーズは未永く多様に愛され、今でもなお支持者が多い大人気シリーズ！

1997年に生まれ、20年以上愛されている、そろそろ遊んでた子供が親になる長寿ホビー！

デジモンを育てるためにはリアルな時間を割かねばならず！

かつ、リアルタイムでデジモンがするウ○コをすぐに掃除しないとまともに進化しない仕様！

おかげで子供達が学校に持って行って育てるという事例が多発！

デジモンがエサ寄せと授業中に鳴いて先生に見つかり、取り上げられるという事例も多発！

子供達は皆、相棒が封印されたような心境で泣いたとか！

汝、その風位なる封印の中で安息を得るだろう！ 永遠に儚く！

長台詞、そして息継ぎ、長台詞。

「加え、あの人はダン・ベルリネッタ！」

元 D S A A (D i g i m o n S a v e r s A c t i v i t y A s s o c i a t i o n) の有名選手!

かつて D S A A のランカーとして、ワールドランク一位だったほどの人!

チャンプだった Mr. ストラトスにこそ勝てなかったものの、間違いなくあの時代の最強の一人!

燕尾服仮面が持っているのはウオーグレイモン。

ダン・ベルリネッタが持っているのはメタルガルモン。

デジモンの格は共に最上級かつ互角。これは女房を質に入れてでも見ないといけな
いわ!」

「か、解説二連撃!?!」

「サラの突発的抜刀解説は、隙を生じぬ二段構え!」

腐女子特有の秘奥義、”ホモかけるホモの閃き”に似た二段構えの発想力に、サラが
目覚める。

「私が知りたいことは一つに集約される。

君の人格。君が娘の揺らがぬ味方であるか。

そして、君が居ることで娘の心の何が保証されるのか。

……それさえ確認できればいい。つまり、君を知れば十分なのだ」

「娘思いなのですか」

「親で在るといっただけだよ」

ダンはリンネの学校生活の実情も知りたかったが、それを知らなくてもリンネが元気にやっているかと確信できる方法が一つだけある。

それは、リンネの友達の様子を確認すること。

あるいは、学校でリンネの味方になってくれる誰かが居ると知ることだ。

彼は父として、燕尾服仮面を試そうとしている。

二人の男の争点となってしまうたリンネは、あたふたしながらあつちへ行ったりこつちへ行ったりしていた。

「ど、どうしよう……燕尾服仮面様とお父さん、どっちを応援すれば……」

「そういう天然なところがイラツとくんのよベルリネツタアッ！」

男達の端末がぶつかり合い、接続され、二体のデジモンが戦いを始める。

否。

戦っているのはデジモンではない。デジモンを通して戦う。この二人なのだ。

「ルールはDSAA (Digimon Savers Activity Association) 公式ルールだ」

「いいでしょう。いい……」

「勝負ッ！ ㊦

天地揺らがす激戦が、二人の間で繰り広げられる。
そして――

「私の、負けか……」

勝者は敗者を見下ろし、敗者は地に膝をつく。

それが勝負の世界の掟。

燕尾服仮面は地に膝をつき、敗北の味を嘔み締めていた。

「あの玩具分野なら何でも勝てそうだった燕尾服仮面様が……」

（あ、なんかお腹空いてきちゃった……後でミッドナルド寄ろうって二人に言おう）

「燕尾服仮面様が負けた……なんてこと……」

いじめっ子の三人も、流石に動揺を隠せないようだ。

「お父さん、凄……」

燕尾服仮面に無敵のイメージを持っていたリンネも、父に尊敬の眼を向けている。

「ダンはそのような娘に苦笑し、燕尾服仮面を優しげな眼で見下ろしていた。」

「私も衰え、弱くなったものだ。燕尾服仮面君……手加減したね？」

「なんのことやら」

「娘の前で父に花を持たせようとするとは……成程、魔法の奥の『君』が見えてきたな」

「あなたが何を言っているか分からないな。私の負けであることに変わりはない」

燕尾服仮面はやや食い気味にダンの言葉を自分の言葉で遮って、「これ以上何かが露見する前に」と考え撤退の動きに入る。

「……必ずやいつか、勝利で私のことをあなたに認めさせてみせよう。さらばだ！」

そして、視界を埋め尽くす魔力製の花びらを発生させ、それに紛れてどこぞへと消えて行った。

最後に、高笑いだけを残して。

「燕尾服仮面様……いったい何者なんだろう……」

娘の呟きに父が振り向けば、いつの間にかやらいじめっ子達まで居ない。

それもそうだ。いじめっ子が恐れるのは親や教師にチクられることである。

親が出て来た以上、いじめっ子にできるのは事態が発覚しないよう逃げることだけ。

「リンネ、迎えに来たよ」

「あ……ありがとうございます。お仕事はどうしたの?」

「今日は私もローリーも早くに用事が片付いてね。」

「家族皆で揃って、時間を合わせてご馳走を食べよう、という話をしていたんだ」

「ご馳走? わあっ、楽しみ!」

無邪気に喜ぶリンネに、父の口元もついほころぶ。

娘は突然出来た父親に遠慮していて、父は血の繋がらない娘に対する距離感を掴みきれていなかったが、そこには確かな家族の愛があった。

リンネは父と帰ろうとして、その途中で校舎から出て来るクラスメイトを発見した。

そして、何も考えずに反射的に声をかけ、手を振る。

「あ、ドローン君。さようなら!」

「さよなら」

ライは返事を帰すが、リンネはすぐに自分の失態に気が付いた。

「リンネの友達かな?」

「——あ、え、と」

彼に声をかければ、父からこう言われることは予想できただろうに。

リンネは父の問いに答えられず、口ごもってしまう。

彼は友達ではない、ただのクラスメイトだ。そんなことは、リンネにだって分かって

いる。

だがそう言ってしまえば、そこから話が繋がってしまえば、リンネは嘘をつくか友達が居ない現状を素直に白状するしかなくなる。

編入当時は居た友達も、いじめの開始と同時に全て消え失せてしまっていた。

いじめの状況自体は、改善傾向にある。

もう少し時間が立てば、状況が何か変わるかもしれないが……少なくとも現段階で、リンネに『学校の友達』は一人も居なかった。

「……」

ライのいつもの無愛想な顔が、無口なスタンスが、今はリンネを怯えさせる要素にしかならない。

彼が口を開けば終わりだ、とリンネは思い、ぎゅつと目を瞑っていた。

そんな少女を見たライは、顔に出さずに呆れ、同情し、その言葉を口にすることに怯えながら、腹を切るような覚悟でその言葉を口にした。

「友達ですよ」

「……え」

「僕とベルリネッタさんは、友達です」

その言葉こそが、リンネ・ベルリネッタの『家族に心配させたくない』という願いを

叶える、たったひとつのものだと知っていたから。

「彼女には友達がいる。玩具で遊ぶ相手も居る。あなたが心配するようなことは何もありません」

「……そうかい」

ダンには見えない位置で、ライには見える位置で、リンネが目を輝かせる。

”これで誤魔化せる!”という多大な歓喜。

そして、”ありがとう!”という感謝の気持ちも顔にも雰囲気にも表れている。

全身全霊で嬉しさを表現しているリンネを見ると、少年は照れ臭くなって目を逸らしてしまふ。

だが目を逸らした瞬間、リンネはSCP—173のごとく一気に接近して手を握って来た。

「そうだよね、私達友達だよね!」

いじめが始まって態度が変わらなかつたクラスメイトと、いじめが終わる前に友達になれた。その事実が嬉しいらしい。

リンネは目を輝かせて、彼の手を握り握手する。

「そうだね、ともだ……全ての関節が折れるッ!」

「あつ」

そして、握撃が綺麗に決まった。

少年の細い指に激痛が走り、リンネがごめんなさいごめんなさいと必死に謝罪を開始する。それを見て、ダンは愉快そうに笑っていた。

あわあわしているリンネの横で、ダンは少年の耳元に口を寄せ、手で周りを覆い、リンネに聞かせないよう小さな声で囁いた。

「君のような子なら、信頼することに迷いはない」

「――」

「重要なのは勝ち負けでなく、信頼できるかどうかだ。

君もそれは分かっていただろう？

私の答えを聞く前に逃げたのは、答えを聞くのが怖かったからかな」

「……失礼します」

そそくさと、ライはダンから逃げるように帰って行った。

「……あれ？ ドローン君は？」

「リンネが手を冷やそうとハンカチを濡らしに行ってる間に、帰ってしまったよ」

「ええっ!!」

「ハンカチを濡らしてくるから待ってて、と言えば彼も待っていてくれただろうに」

「た、確かに……」

血が繋がっていないためか、父親と比較にならないレベルの天然なリンネ。その手をダンが引いて、迎えの車の後部座席に並んで座る。

「友達と楽しく過ごさせているようだね、リンネ」

「うんっ!」

並ぶ二人の笑顔からは、二人が親子であることを疑うものは、何一つとして見つからなかった。

「友達もちゃんと出来ているようで、何よりだ」

「きつと、お母さんがくれたスクーデリアのおかげだよ!」

「それはお母さんに言っておきなさい。きつと喜ぶから」

「うん!」

リンネが笑顔で居てくれれば、それでいい。

娘の好きなようにやらせてやりたいと考え、笑顔になれない道に進むようなら、その前に導いてやりたいと考える。

ダン・ベルリネッタは、そういう父親だった。

「あれが燕尾服仮面という人かい」

「うん。仮面を取ったらどんな人なんだろう……?」

「仮面を被らなければ、勇気を出せない人間も居る。」

仮面がなければ、誰かの味方になれない人間も居る。

仮面越しでなければ、伝えられない言葉というものもある」

「……？」

「リンネにはまだ、難しいかもしれないね」

「そう、なのかな？」

「相手が友達だと言ってくれるのを待っている内は、子供だよ」

「……ううっ」

何もかもが見透かされているような気がして、けれど全部は見透かされていないはずだと自分に言い聞かせ、耳を赤くしたリンネが顔を逸らす。

車の中で、可愛い娘を持った父親は、いつまでも笑っていた。

一方その後。

家に帰ってからライ・ドローンは、接着剤片手に砕けたクラツシユギアと悪戦苦闘していた。

魔法を使えば一発なのだが、これは自分の手でやるから意味のあることなのだ、少年は自分に言い聞かせる。

かくして、リンネに粉碎されたギアは、接着剤だけで歪ながらも元の形を取り戻していた。

「ありがとう」

少年は修理したギアを棚に置き、頭を下げる。

「お前はあの子の笑顔を守る戦いに準じた英雄として、部屋にずっと飾っておいてあげる」

そして、拝む。

「南無」

少年は昔から、物を大切にする子供だった。

百人乗っても！　大！　丈！　夫！

本日、日本で言えば金曜日。更に言えばその放課後。

「明日から休みだね、ライ君」

「ベルリネッタさん、友達になった途端対応が切り替わった」

「リンネ」

「……リンネさん」

生来の気質で愛が重い、友情が重い、信頼が重い、一度心の距離を詰めると中々離れないリンネ・ベルリネッタの友達攻勢に、ライ・ドローンは追い詰められていた。

「友達を名前で呼ぶのってそんなに恥ずかしいかな……」

「……」

恥ずかしいし嫌だよ、と少年は言おうとしたが、ぐつとこらえる。

「ベルリネッタさんは、友達がほほイコールで親友なタイプ。」

少し接近するとそこからグイグイ来るといふか、距離感の基準がまるで踏み込むボク

サー」

「え、もしかして、馴れ馴れしかった？」

「……いや、別に、リンネさんは悪くない」

「そう？ よかった……」

言うなれば彼はサンドバッグ。

逃げられないし避けられない。そんな彼に彼女はぐいぐい接近し、友達ならこれくらいよね！”くらいのノリで、親近感という名の拳を叩きつけてくる。

スマブラで例えれば、ジャンプとダツシユでガンガン接近してファルコンパンチを打ち込んでくるキャプテンファルコンだ。シヨイヤムー、シヨイヤムー。

「リンネさん、変わった」

「変わった？ 私が？」

「よく笑うようになった」

「……そう、かな。そうかもね」

最近ミッドで流行っている『君の笑顔が報酬だ』というタイトルの本を広げ、少年は本の中身に目を走らせる。

「そうだとしたら、燕尾服仮面様のおかげだよ」

「ふーん」

「何が目的で助けてくれたんだろう、気になるな」

「案外つままないもので満足してるんじゃない」

「つまらないものって……燕尾服仮面様が何か手に入れてるのは見たことがないよ？」
「じゃあリンネさんの目には映らないものなんでしょ」

「……？」

なぞなぞかな？ とリンネは思い、昔孤児院で読んだ『かいけつゾロリのなぞなぞ200連発』の内容を思い返しながらいじめる。容易なことだった。

本を読む少年と、悩む少女。

いじめっ子達がそんな二人に近寄るのは、容易なことだった。

「ちよつといい？」

三人のいじめっ子が、呼び出しを図る。

だがその視線は、リンネではなくライに向いていた。

分かっていったことだ。

ダンの前でリンネの友達を名乗った時から、ライは覚悟を決めていた。

リンネと一緒に、いじめられる覚悟を。

”そうなりたくない”と想っていた立場に落ちることを。

彼女が地獄に落ちるなら、共に地獄に落ちることを。

リンネのクラスメイトからリンネの友達になるということは、そういうことだった。

「ライ君……」

「先に帰った方がいい」

「でも……」

「君が居て悪化することはあっても、状況が良くなることはない」

「……っ」

ライはリンネを帰路につかせ、いじめっ子達に付いて行く。

もうそろそろベルリネッタさんの家の迎えが来る時間だ。家族に心配をかけたくないリンネからすれば、選択の余地など無いに等しい。

リンネが無理やりついに行っても、いじめはエスカレートするだけだろう。

彼女には事態を悪化させることはできても、好転させることはできない。

少年を助けようと踏み留まり、自分の無力さを悔い、悲しみと悔しさを顔に浮かべるリンネ。

その思いだけで、少年の心は十分救われていた。

「ねえ、あんたベルリネッタさんのこと好きなの？」

空き教室に連れて行かれて、彼は開幕そう言われる。

よくあるいじめだ。

『お前あいつのこと好きなの？』は子供がよく使う煽りの言葉であり、からかいの言葉であり、大人になるにつれて自然と消えていく言葉である。

誰もが子供の頃に持ち、大人になる過程で失っていく『恋愛そのものへの気恥ずかしさ』。それが、こういう言葉を子供に言わせているのだ。

いじめっ子達はニヤニヤしている。

中途半端な回答を返せば、明日からリンネとライが付き合っているという噂が学校中に流れ、これまでのいじめ以上に苛烈ないじめが始まることだろう。

リンネとライの学校生活を守るために、中途半端な回答は許されなかった。

「趣味悪いわねー。あいつ、話題も少なそうじゃん。話してて楽しくないと思うんだけど」

「確かに、僕は彼女と話してもあまり楽しくない」

「だよねー！ 天然だからからかい甲斐はあるけど、それだけだし！」

彼がいじめっ子に返した言葉は、嘘だった。

「君達が心配してるようなことは無い。僕が彼女にそういう感情を向けたことは一度もない」

嘘である。

「僕は彼女に隣の席の人以上の何かを感じたことはない」

嘘である。

「彼女がいじめられてるのを見ても、助けたことは一度もない」

嘘である。

「君達が彼女をいじめてるのを見ても、僕は何もしない。約束する」
嘘である。

「あんた、ああいう付き合い方しててあの女のことなんとも思っていないって言うの？」
「うん」

嘘である。

「……まーいいわ。あんたも賢い選択をしなさいよね」

「うん」

嘘である。

いじめっ子達は彼のリンネを突き放した返答に満足したようで、彼を離して去って行つた。

「……」

少年は空き教室で、机に背中を預けるようにごろりと寝転ぶ。

「賢い選択、か」

賢い奴はあんなオモチャで遊ばないだろ、と少年は思う。

その右手には、消しゴムに手足と顔が生えたキャラクター・ケシカスくんの消しゴムが握られていた。

その夜、○I N Eで少年が何事もなく帰れたと伝え少女を安心させ、その翌日の土曜日。

リンネは祖父のロイ・ベルリネツタと外出するため、公園のベンチに座り、ウキウキした気持ちで足をぶらぶらさせていた。

携帯電話越しに少年に無事だったと言われ、それをあつさり信じてしまうのはリンネの欠点であると同時に、美点でもある。

こうして、許容範囲であれば素早く気持ちを切り替えられるからだ。

リンネの祖父はここ数年、病気のせいでベッドから離れられない状態だった。

だがここ最近、少し体調がよくなってきたらしい。

看護師の付き添いがあれば、一日くらいは外を歩いてもいいと医者から許可が出ていた。

そこで、ロイは孫娘のリンネと少しばかり外を歩こうという約束をしていたのであ

る。

リンネが居るこの公園は、学校のそばの並木道沿いにある公園だ。

彼女が登下校の際、”綺麗な花がたくさん咲いてる並木道だ”と毎回思っている並木道に、ほんの数秒で移動できる位置にある。

ベルリネツタ家から車に乗って移動すれば、二人揃って行けるだろう。

だが、ロイはそうしなかった。

「何年先かは分からないが、好きな子ができた時のため、デートの予行練習にするとい

い」
好々爺という言葉をそのまま形にしたかのように、ロイは笑った。

まだ恋愛というものがピンと来ないリンネであったが、祖父と一緒に出かけできるというだけでも彼女は嬉しい気持ちになってしまう。

祖父も孫娘も、互いに家族思いな二人であった。

（おじいちゃん、まだかな）

リンネは一人、並木道そばの公園にて座っている。

少し経ってから、ロイが到着する予定だ。

”この楽しみなもどかしさがデートっていうのなんだろうか？”と、リンネは自分なりに考える。

彼女の手の中には、ライがくれた『ギエピー』という正式名称のストラップがあり、リンネは手の中でそれを転がし遊んでいた。

「お前、リンネ・ベルリネットだな？」

だが、彼女はこういう星の下に生まれたのだろうか。

何か変なものに呪われているのだろうか。

ただ祖父をちよつとだけ待っていていようと思っただけなのに、その短い時間で、リンネは何人もの不良に囲まれていた。

声をかけられ、不良達を見て、リンネの心は萎縮してしまう。

「あ、あなた達は……？」

「ククク……ちよつと付いて来てもらおうじゃねえか」

「へっへっへ、親分に逆らわない方がいいぜ？」

「へっへっへ、そうだぜ」

「へっへっへ、大人しくしな」

不良に連行され、リンネは今座っていたベンチよりも少し大きなベンチに連れて行かれる。

連れて行かれたベンチの横には、大きな自動販売機があった。

不良のリーダーっぽい赤毛の男は、悪人面でリンネに問いかける。

「ククク……どうだ、ジュースでも飲むか。何が飲みたい？」

「へっへっへ、親分に逆らわない方がいいぜ？」

「へっへっへ、そうだぜ」

「へっへっへ、大人しく欲しいやつの名前を言いな」

「えつと……じゃあそのミッドクターペツパーで」

赤毛の男がリンネの飲みたがっていた飲み物を買ひ、手渡す。赤毛の男は不良全員に一番安い飲み物を買ってやり、投げ渡し、あざーっす！　と言われたから悪役面で笑った。

「あ、ありがとうございます」

「ククク……ベンチでも座るか？　立ち話もなんだしな」

「へっへっへ、親分に逆らわない方がいいぜ？」

「へっへっへ、そうだぜ」

「へっへっへ、大人しくしな」

リンネがベンチに座ると、その隣に人二人分ほどの距離を空けて赤毛の親分が座る。そしてその周囲を不良達が囲んだ。

不良に囲まれたリンネには、もはや恐怖しか無い。

赤毛の男は、鞆の中からコンビニの袋と、その中に入っていた“見るからに皆で食べ

る用”っぽい感じのお菓子の袋を取り出す。

「ククク……ミッドラ焼きとミッドンタコス、どっちが食いたい？」

「へっへっへ、親分に逆らわない方がいいぜ？」

「へっへっへ、そうだけ」

「へっへっへ、大人しく食べたい方の名前を言いな」

「え、えと……ドラ焼きで」

戦々恐々としながら、リンネは渡されたお菓子を食べ、ジュースを飲む。

それを見た赤毛の男が、悪役にしか見えない笑みを浮かべた。

「よし、食ったな」

「え？」

「スジは通して貰うぞ。食った菓子とジュースの分の情報は喋ってもらおう」

「だ、騙したんですか!？」

「ククク……騙しただなんて人間きが悪い。食った分のスジを通せただけの話だけ

？」

なんと卑劣な罠か。相手に借りを作らせ、その借りを無理矢理に返させる。返さなければ暴力に走るぞーと拳をチラつかせれば、もうおしまいだ。

相手が暴力慣れしていない小学生のリンネであることを考えれば、効果的すぎる交渉

であった。

「俺はお前の知り合いの一人、サラの兄だ」

「えっ!？」

「お前の話は聞いてるぜ？ 性格が悪いクラスメイトが居るつてな。そうは見えないが

……」

「どうやらいじめっ子は、自分を正当化する形で、大好きなお兄ちゃんに学校のことを話していたらしい。彼は、学校での実情を知らなかったようだ。

「まあいい、今日用があるのは、お前の味方をしてるとかいいう男のことだ」

「!」

燕尾服仮面様のことだ、とリンネの体が強張った。

不良達の狙いは燕尾服仮面。

この赤毛の親分が率いる不良達は、最初から燕尾服仮面をターゲットにしていたのだ。

「エンヴィーフック仮面だったか？ クソっ、敵ながらかつけえ名前じゃねえか」

「えっ」

「エンヴィーフック嫉妬の拳とか最高にかっこいいじゃねえか、センスあるぜ」

「……えっ?」

「お前を捕まえりや飛び出てくるって、そう聞いてたんだがな……お前、何か知らないか？」

「あ、いや、その、知りません。正体や素性は私も知りたくらいです」

「あん？　嘘だったら承知しねえぞ」

「ほ、本当です！」

「ちつ、マジかよ。最悪の場合は恥捨ててお前を人質に取ろうと思つてたつてのによ……」

赤毛の男は、リンネの方をチラチラと見る。

手段を選んでる場合か？　とスジの通らない人質という手段を取ろうとし。

いや、んなスジが通らねえ真似はしたくねえ、と迷つて止める。

そんな親分を、親分から奢つて貰つた飲み物を飲む不良達が生暖かく見守つていた。

「そこまでだ！」

赤毛の男がリンネに手を伸ばそうとし、その手を止めるかのように声が響く。

その場の全員が、一斉に振り向く。

するとそこには、黄色く染まったイチョウの木の上に立つ燕尾服仮面の姿があつた。

「いたいけな少女を捕まえ、私を呼び出そうとする不埒な輩。許せん！」

「燕尾服仮面様！」

イチヨウの木に下半身が埋まっていた状態から、燕尾服仮面は華麗に地に飛び降りる。

(……痛い！)

飛び降りた時に少し足を痛めていたが、仮面が彼の痛みを隠してくれていた。「てめえがエンヴィーフック仮面か。待ってたぜえ。」

シヤレオツでハイカラな格好じゃねえか、渋いぜオタクよお……ククク。

サラから話を聞いてたんだ。円滑な学園生活を邪魔するやつだつてな……

俺の妹の学校での生活を守るため、てめえの得意なオモチャで叩きのめしてやりに来た！

覚悟しやがれ！ 妹を守るのは兄の役目！ 妹の敵は俺の敵だ！ かかってこいや

あつー！」

「へっへっへ、親分に逆らわれない方がいいぜ？」

「へっへっへ、そうだぜ」

「へっへっへ、親分に勝てるわけねえぜ」

不良達に囲まれるが、燕尾服仮面は眉一つ動かさない。というか眉が見えない。

燕尾服仮面は懐に手を入れて、そこからバトルえんぴつ……通称『バトエン』を取り出した。

五本の指に四本挟み、両手合わせて八本構える。

「黙れ、外道。……次に戦いがあるのであれば、これを使おうと思っていたが」

バトエンは、ドラゴンクレストモンスタースのキラクターが描かれるシリーズが一番多い、遊べる鉛筆だ。

転がすことで『こうげき』『ひのいき』『ぼうぎよ』などの行動が行われ、簡単なルルで戦闘が行えるという点が受け、爆発的な人気を博した。

勉強と遊戯の融合。まごうことなく、小学生ホビーの象徴の一角である。

燕尾服仮面はそのバトエンを構え、空へと投げる。

空へと舞い上がったバトエンは彼ら全員を囲むように、円形に地に落ち、燕尾服仮面の魔力を通して円柱状の結界を構築した。

「こいつは……極めて隠密性の高い魔導結界!? バトエンを基点にしたのか!」

「私を理由に、ベルリネッタ嬢に迷惑をかけたな。貴様も私も、許せそうにない」

バトエン結界の中心で、燕尾服仮面は怒っていた。

彼らに。自分に。自分が原因となってリンネに迷惑をかけてしまった現状に。

「ポケモンで悪タイプに何故格闘と虫が効果抜群なのか知っているか?」

それは、スタッフが仮面ライダーが好きだったからだ。

バツタが格闘で悪を倒すのが、世界の法則であるとしていたからだ。

全ての人間には大なり小なり、どこかで悪行を止めねばならない使命がある」

おこだ。激おこだ。激おこ真田丸である。

「貴様の土俵で戦つてやろう、赤毛の男」

「言うじゃねえか、仮面野郎。気に入ったぜ。そういうノリは大好きだ」

その怒りに、赤毛の男は燕尾服仮面とリンネに対する評価を改めた。

こういう怒りを見せられる人物、それほどまでに思われる少女に、単純な評価を下すのをやめたのだ。男は、腰のホルダーからカードの束を抜いて構える。

「こいつで勝負だ！ オモテヤ 玩具の王、『遊戯王』！ 説明は要らねえな！」

「！……ここで遊戯王か……！」

「ルールはミッドで最も普及している古代エンシエントルール！ 異存はねえな！」

説明しよう！

古代エンシエントルールとは、ミッドにおいて最も定着しているルールである！

ミッドには輸入の関係でほとんどカードが入って来ない！

そのため、カードプールが初代漫画遊戯王の頃のカードばかり——許可を得て魔法で複製された——であり、その時代から後のカードはほとんどないのである！

昨年の都大会優勝者ゲンヤ・ナカジマに優勝賞品として送られたカオス・ソルジャー——開闢の使者——でさえ超の付くレアカード扱い。

当然、禁止制限などもほとんどない。

このカードを使って戦う決闘者達は、デュエリスト自然と古代ベルカの騎士に例えられた。

決闘こそが古代ベルカの騎士の本懐。

なればこそ、このルールで戦うデュエリスト達は、イコールでベルカの騎士なのだ。

ちなみに元祖遊戯王の連載終了は12年前。今遊戯王を触っているキッズ達の一部からすれば、『生まれる前に終わっていた漫画』である。

劇場版遊戯王・光のピラミッド等を皆がワイワイ見ていた世代くらいまでだ。

余談だが、初代漫画遊戯王の連載終了が2004年3月22日、テレ東初代アニメ遊戯王の放映終了が2004年9月29日、初代アニメリリカルなのはの放映開始が2004年10月1日。

世代が結構近いので、ここに存分に『時間の流れ』を感じて欲しい。

「へっへっへ、諦めた方がいいぜ?」

「へっへっへ、そうだぜ」

「へっへっへ、親分に勝てるわけねえぜ」

取り巻きの不良の声など聞こえていないかのように、燕尾服仮面は平然としている。

二人の男は対峙し、同時に魔力でデュエルディスクを構築する。

ウィザードデュエリスト魔導師で決闘者であるのならこれは標準技能。

驚くほどのことでもない。

「燃えて来たぜ！」

「下がっていなさい、ベルリネツタ嬢」

「は、はい」

「^{デュエル}決闘っ！」

かくして、戦いは始まった。

先に動くは赤毛の男。

「先行は貰った！ 俺は、ブラッド・ヴォルスを召喚！ 伏せカード二枚でターンエンド！」

赤毛の男はモンスターを召喚し、リバース二枚を伏せてターンエンド。ちなみに^{エンシメント}古代ルールでは魔法罫は「伏せる」と言わなければ反則負けとなる。生贄召喚ではなくアドバンス召喚と言うと反則負けとなる。「生贄に捧げる」と言わず「リリース」と言うると反則負けとなる。

「へっへっへ、親分の勝ちパターンだぜ。生贄無しで攻撃力1900！」

「へっへっへ、そうだけ。おれらは子供の頃から親分に一回もデュエルで勝ったことがねえ」

「へっへっへ、親分は騙されやすいが仲間思いで家族思いで強いんだ。負けるわけねえ」

かつて、四つ星攻撃力1900のカードを何枚持っているかがステータスであった時代があった。

赤毛の男は、ジェミナイ・エルフの強さで昔から無双していた男である。

生贄無しで攻撃力1900という圧倒的な説得力。

その強さこそが、古代環境において無二の最強を保証していたのだ。

近年地球においても、デュエルリンクスなどでその強さが再認識されている。

強そうなモンスターが出て来たこと、不良達の反応から、リンネは不安そうに燕尾服仮面に声をかけた。

「だ、大丈夫ですか……?」

「安心したまえ、ベルリネット嬢。このカードでも見ているといい」

「? あつ、わあ……綺麗……」

燕尾服仮面はブルーアイズホワイトドラゴン（ミッド限定仕様）をリンネに渡し、リンネはその輝きに目を奪われた。

小学生はレアカードの輝きに目を奪われる。

大人になると忘れてしまう感覚だが、子供はカードがキラキラしているだけでちよつと興奮し、性能がゴミでも宝物にしてしまうものだ。

男の子は綺麗で光ってるものが好き。女の子は男の子以上にそういうものが好きだ。

大人になっても宝石に惹かれる人であれば、その心をまだ持つていけると言えるだろう。

ブルーアイズホワイトドラゴン（ミッド限定仕様）は光を反射して光り、夜中は大気中の魔力を吸って光り、デッキの一番上にある状況ではドロータイミングを認識して光り、デュエルを演出するという触れ込みで生産されたレアカードだ。

光の封殺剣等を食らうことで、相手側の神シーンを演出する助けもすると評判で、一部のエンタメデュエリストから大人気の一部である。

「あ、傾けると光の模様が変わる……」

スクーデリアを気に入っていたことから分かるが、リンネもまた、こういうキラキラしたものに魅力を感じる感性を持っていた。

彼女の意識はすっかりデュエルの内容ではなく、目の前の綺麗なカードに向いている。

「オラ、どうした？ その仮面は飾りか？」

俺はお前の仮面を見た時からデッキが分かかってんだよ。

噂に聞くレアカード、仮面魔獣のデッキ……だろ？ ククク、お見通しだ」

「すぐに分かる。私のターン、ドロロー。スタンバイ飛ばしてメイニー」

リンネに慈愛を見せる燕尾服仮面。

だが、忘れてはならない。彼は怒っているのだ。

「処刑人マキュラを召喚する」

ゆえに、今日の彼は燕尾服仮面様であると同時に、処刑人仮面様である。

『処刑人―マキュラ』。

遊戯王の闇を象徴する悪夢のカードだ。

有する能力はシンプルに一つ、「このカードが墓地へ送られたターン、このカードの持ち主は手札から罫カードを発動する事ができる。」のみ。

漫画遊戯王を読んだことがある人間なら、カードの方に手を出していなくても、五秒でこの能力の恐ろしさは説明できる。

「先行ターン目でマキュラが死んで現世と冥界の逆転が発動するんじゃないやよ」と言え
ばいい。

「ぐあああああああああつ！」

「お、親分ー！」

燕尾服仮面は、たった一ターンの赤毛の男を敗北に突き落とす。

それでいて、赤毛の男に傷一つ付けずに勝利した。

まるで、1999年9月にフルタ製菓が『日本の動物コレクション』シリーズとして産み大人気を博した名菓、チョコエッグのチョコだけを溶かし中のフィギュアを取り出すかのように、精密に。

なんとという精密性であろうか。

「燕尾服仮面様、このカード本当にきれ……」

……あれ、終わっただんですか？ まだ始まってないんですか？」

「いや、終わったよ」

周囲の不良達に駆け寄られる赤毛の男が、息も絶え絶えに体を起こす。

「お前、まさか……」

そして男は、燕尾服仮面の正体の一端を見抜いていた。

「二年前、敗者を魔法でカードに封印してしまうという次元犯罪組織が居た！

組織名は『帰って来た新グルーズジャック二世』！

行われたのは、リンカーコアではない人丸ごとの収集！

闇の書の被害の再来とさえ言われた大事件！

普通の魔法事件でなかったため、管理局でさえ手を焼いたという難事件！

それを解決したのは、千年眼ミレニアムアイの異名を持つ決闘者デュエリストヴェロツサ・アコース。

そして、その男に協力していた、仮面のマキキュラ使いが居たという噂が……まさかお前が！

「昔の話さ」

(この長文解説、疑いようもなくサラさんのお兄さんだ……)

燕尾服仮面は実戦経験豊富のようだ。ならば、小学生時代から近所の悪ガキを遊戯王でまとめ上げ、この歳になってもお山の大将をやっているだけの男では勝てるはずもないだろう。

「へっへっへ、親分は調子が悪かったただけだぜ」

「へっへっへ、そうだぜ」

「へっへっへ、もう一回やったら今度はまぐれはないぜ……」

「やめろお前ら！ 実力の差が分かんねえのか！」

親分の尊厳をオラオラと守ろうとする不良達であつたが、赤毛の男はそれを止め、敗者として勝者に敬意を捧げる。

「こいつが妹から聞いた通りの男じゃねえことはデュエルで分かつた。」

容赦の無さの中にも、誠実さがあつた。こいつは外道でも悪党でもねえ」

「親分……」

「なら、こいつをとつちめるのはスジが通らねえ。

俺の妹が嘘つくわけねえし……何か、誤解があつたんだらうよ」
ヤンキーのくせに人を簡単に信じる。一度信じたら疑わない。

この赤毛の男は、どこことなく面倒臭い感じがする男だった。

ミッドチルダの橘朔也の異名を襲名するのも時間の問題だらう。

「善良だな、君は。短慮だが、兄の鑑だ」

「ああん？」

悪いやつは痛い目を見る！

嫌な目にあつたやつには味方が出来る！

現実はそのじゃないって大人はほざくが、俺の目と耳が届く範囲の現実はそうすんだ
よー！」

短慮だが、善良。燕尾服仮面の人物評は的を射ていた。

彼は典型的な、正義感と善意が人を傷付けるタイプである。

彼の周りの不良達は、それを分かった上で彼に付き合っている人間なのだろう。

「今日は帰らせて貰うぜ。妹と話して、また後日来るわ」

「ああ、そうしたまえ」

サラの兄は赤毛を揺らして、踵を返す。

そして、格好付けすぎて周囲確認がおろそかになり、背後のリンネにぶつかってしまった。

リンネはキラキラしたカードに見蕩れるあまり男に気付かず、気付いた時には男が目の前で、半ば反射的に男を右手で突き飛ばしていた。

「あつ」

燕尾服仮面のホビー戦争が始まって一年が経とうとしている。

その年月が、リンネ・ベルリネッタに『筋力の成長』を与えていた。

ゆえに、突き飛ばすその一撃はもはや張り手のそれである。

彼女の張り手の威力は既に横綱・白鵬はくほうと同レベルの域にあった。

言うなれば、白鵬はくほう少女リリカルリンネ。

咄嗟に込められた力は、ゴリライトブレイカーとなって男の体を吹き飛ばす。

「ひびぶつ」

吹き飛ばされた赤毛の男は木にぶつかり、何の目的で持っていたのか分からないが、懐に入っていたナイフが衝撃でくるくると宙を舞う。

そして、キリストの奇跡に等しい偶然をもって、リンネの手元のカードに突き刺さった。

「あーっ!？」

リンネの不運のせいかな。俗に言う世界の修正力Ⅱサンの仕事だろうか。あるいは抑止力Ⅱサンの仕業だろうか。

信じられない流れで、ブルーアイズのカードに節穴が空き、リハクアイズになってしまおう。

「す、すみません！

き、キラキラしたカードに、見とれてしまつて……

ああ、そうじゃなくて、私が悪くて……燕尾服仮面様のカードに穴が……！

あわわわわ、よく見たら魔法式が壊れて光らなくなつてる!? ど、どうすれば!」

「……」

慌てるリンネからカードを受け取り、燕尾服仮面は沈黙する。すぐにフォローが出て来ないあたり、彼もショックを受けているようだ。

「いや、嬢ちゃんが謝るのは筋違いだ。

すまねえ、俺が前を見てなかったせいで……

このまま帰つたんじゃスジが通らねえ。

かくなる上は、この場でこのカードで腹かつさばいて、詫びとさせてもらおうツ!」

そんな彼らを見て、赤毛の男も覚悟を決めた。

手に持っていたカードに魔力を纏わせ、腹に当てる。

おそらくは腹切り。ミッドチルダ式の詫びを見せようというのだろう。

「へっへっへ……お前ら止めろ！」

「へっへっへ……いやお前も止めろ！」

「へっへっへ……つか全員で止めろ！」

「何をするだアーツ！」

それを不良達が止めに動き、赤毛の男も抵抗する。

ぎやーぎやーと騒ぐ彼らを見て、燕尾服仮面は溜め息一つ。

燕尾服仮面は少女の手を引き、赤毛の男の肩に手を置き、謝る彼女と詫びようとする彼を共に諫める。彼の声色は優しかった。

「これは事故だ。誰も悪くない。そうだな？」

「でも……」

「だが……」

燕尾服仮面は物質操作魔法を起動、境界構築に使っていたバトエンを回収し、ポケットからケシカスくん型消しゴムを取り出す。

そして、その両方をリンネの手に握らせた。

「ベルリネッタ嬢、部屋での勉強などに使うといい」

「え、でも……この鉛筆と消しゴムは、削ってはいけないものじゃないんですか？」

削ったらオモチャや人形として使えなくなってしまう、そういうものなんじゃ……」
「いいのだ」

バトエンは鉛筆として使えば遊べなくなってしまう。

ケシカスくんは消しゴムとして使えば消しゴム型フィギュアでなくなってしまう。
だが、それでいい。

それでいいのだ。

「ホビーとはいっつか壊れるもの。

壊れ、親にこつそり捨てられるのが運命だ。

子供の頃遊んでいた玩具が20代の頃残っている方が希少なのださ」

オモチャとは、十年後、二十年後も残っているものなのだろうか。

残しておこうと思うものなのだろうか。

いや、違う。

残っていれば見つけた時に懐かしい気持ちにもなれるだろうが、残らなくていいもの
なのだ。

「だが、それでいい。

壊れてもいい、失われてもいいのだ。

無かったことになどならない。子供の胸に、ちゃんと思いは残るのだから」

「そのホビーで遊んだという想い出は、貴方の胸の中に十年後も二十年後も残っているのだから。」

「君が付けているスクーデリアもそうだろう。」

大切なのは物それ自体ではない。そこに込められた想いと、想い出なのだ」

「……あ」

リンネがスクーデリアを大切にしようとしたのは、これが宝石だったからでも、綺麗な見た目だったからでもない。

そこに、『家族の愛』があると知っていたからだ。

「でもなんで、そんなことをあなたが知って……」

「……君は友達に、明け透けに話すぎるくらいがあるな。人に話したことは、伝わるものだよ」

隣の席のクラスメイトだった頃から、友達になった今でもなお、リンネは隣の少年に色んなことを話していた。

少年が、この少女に感情移入してしまうくらいには。

燕尾服仮面はリンネに背を向け、赤毛の男の横を通り過ぎていく。

「君が敗者のスジを通してくれるというのなら……」

今日は私のやり方を、私の流儀を優先させてくれ。頼む」

「……わあーつたよ。……あと、悪かった。最初に、お前を疑ってたことを、謝らせてくれ」

「ふっ、私は燕尾服仮面……怪しまれるのが仕事というものだ！ さらばだ、諸君よ！」
燕尾服仮面が去り、不良達も「悪かったな」とリンネにひと声かけてから、続々とこの場を離れていく。

後には、鉛筆と消しゴムのホビーを握った、リンネ・ベルリネッタだけが残された。

「……あ」

気付けば、リンネのポケットには一枚の紙が入っていた。

役所で貰える、この公園の横にある並木道の案内パンフレットのようだ。

リンネが祖父と見に行こうと思っていた綺麗な花々の、名前や咲く季節などがずらっと並べられている。これで祖父との会話に文字通り“花を咲かせなさい”という気遣いだろう。

誰が入れてくれたかなんて、決まりきっている。考えるまでもない。

「リンネ」

「あ、おじいちゃん」

「勉強かい？ リンネは勉強熱心だねえ」

「うん」

リンネはそうして、祖父と合流する。

右手に鉛筆と消しゴム、左手にパンフレットを握っているリンネを見て、ロイはリンネが今日のために勉強していたと思つたのだろう。

その言葉に、リンネは笑顔で答えた。

「私、勉強ももつと頑張るよ。この鉛筆と消しゴムが無くなるまで」

きつと、最後にはこの鉛筆と消しゴムを使った思い出が残ると、信じて。

数日後。

リンネは迎えるの車に乗り、帰路についていた。

今日はライも先に帰ってしまったため、彼女も早めのお帰りだ。

その途中、リンネの優れた視力が、カードショップの陳列の前でしゃがむ友の姿を捉える。

ライはそこで、財布とカードを交互に眺めていた。

「どうやら『高くても買えない』というほど金が無いわけでもなく、『気軽に買える』ほど金があるわけでもないらしい。」

とはいえ、そのあたりの機微をリンネが察せるわけもなく。

「あ、止めて下さい。」

「はい、お嬢様」

リンネは車を止めさせて、特に何か考えがあったわけでもなく、友達に近寄って行った。

「ライ君、どうし……えっ?!」

そして、少年が見ていたものを見てビックリする。

少年が見ていたのはブルーアイズホワイトドラゴン（ミッド限定仕様）、リンネの手中で穴が空いてしまったカードであり、その下には結構な数字の値段が書かれていた。

（こんなに高いの!?!）

その値段は重度のデュエリストであれば「こんなもんだろうな」となる値段で、一般人が見れば「たかがカードにこんな……」となる値段で、間違いなく小学生が手を出すべきではない値段で、孤児院出身のリンネが白目を剥きそうになる値段であった。

「謝らないと、燕尾服仮面様に……」

「……」

その値段が、今更にリンネの罪悪感を復活させる。ライは無愛想な目でそれを見て、無造作にそのカードを購入した。

「すみません、これください。ラッピングしてこの子に渡して下さい」

「はいよ、毎度あり」

「え？」

突然の行動に少女が戸惑う間に、少年は畳み掛ける。

「燕尾服仮面が気にしてないようなら大丈夫。

カードやつてる人間からすれば、このくらいは端金。

リンネさんの家で動いてる金に比べれば、砂粒みたいなもの」

「それは、そうかもしれないけど」

「子供が大人の財布の心配しても意味はない。

僕がこうして気軽に買えてしまうもので、大人の財布が痛むと思う？」

「……そう、なのかな？」

そう言われると、そういう気がしてきてしまう。

燕尾服仮面に言われた『ホビーはいつかなくなるもの』という考えも、リンネの思考に作用していた。

「気が済まないなら、次に会った時に『ありがとう』って改めて言えばいい」
「……、……うん、そうする」

少年は店主がラッピングしたカードを挿んで、少女に渡す。

少女がそのカードの綺麗さに見惚れていたのを、覚えていたから。

「どうぞ。きつとこれは、僕と君の想い出になる」

「……！」

花の咲いたような笑顔というのは、きつと今、彼女が浮かべているそれだ。

「ありがとう！ 明日の学校で、貰ったものよりもっと凄いいお礼するからね！」

少女は手を振って、車の中に戻っていく。

「お礼？ 僕はもう貰ってる」

彼の鞆の中には、金曜日リンネと話していた時に読んでいた本が、そのまま入っていた。

バザールでござーる、君はどこに行ってしまったんだい
……………？

それは、雨が降りそうな曇り空のある日のことだった。

「よくもまー、私達をここまでコケにしてくれたもんよ、ドローン君」

「……………」

いじめっ子三人に囲まれる、リンネとライ。

当然の結果だ。いじめっ子達が望んでいたのはリンネの孤立。先日の警告もそのためのもの。

にもかかわらず、ライはリンネが話しかけてくれば友人として応えていたし、友人としての付き合いもやめなかった。

彼はいじめっ子達の意図をちゃんと理解した上で、ちゃんと無視した。

結果、いじめのターゲットは二人に拡大し、いじめは更に加熱する。

ムキになりやすい子供に、半端な反抗は逆効果だ。

かといって無視も逆効果になることがあるので、中々難しい。

大人になれば忍耐強くなりブラック企業RX・ロボライダーに機械のようにこき使わ

れても怒らなくなることもあるだろうが、彼女らはどこまでも感情に従う小学生でしかない。

「何よあんた、やっぱそいつのこと好きだったんじゃないの？」

「違う」

「はっ、意味無い反抗しといて今更……」

「君達が嫌いなんだ」

「——っ！」

「……ああ、ダメだ。やっぱり、面と向かって酷いこと言うのは、性に合わない」

その一言だけで、少年はなけなしの勇気を出し切ってしまったようだ。

対し、いじめっ子は予想外の反抗に腹を立てている。

少年は反抗する気を失い、これから行われるであろういじめは苛烈さを増しかねない。

「大丈夫、燕尾服仮面様が、きつと来てくれる」

（……来ないよ）

メンコホビーのスマッシュボマーも、ポケモンのカードゲームも、ゲームボーイの形をした輪投げゲーム型シャンプー容器も、バトルドームも、電撃イライラ棒も、ヨーカイザーも、メダロットも、怪人ゾナーのなぞなぞ勝負も、燕尾服仮面が居なければいじ

めを止める力にはなりえない。

ウエブダイバーの作画と同じだ。人が居なければどうにもならない。

(今日は、来れない)

少年には、燕尾服仮面が来ないという確信があった。

「……素顔では、出せない勇気もある」

「え？」

「なんでもない」

少女は揺るぎなく燕尾服仮面を信じていて、少年は『燕尾服仮面』のことなんて信じていなかった。

怒れるいじめっ子が、鞆の中に手を突っ込む。

そこにはきつと、犬の糞よりも最悪ないじめの道具が入っているのだろう。

「上等よ、喧嘩売ってるのなら、それなりの——」

がばつ、と鞆に手を突っ込んだその瞬間。がらつ、と教室のドアが開いた。

「こつちだな！ こつちに燕尾服仮面の気配が……あん？」

現れたるは、地元最強の決闘者デュエリストと呼ばれて長い、サラの兄。

「んだよ、サラじゃねえか」

「お、お兄ちゃん!？」

「そっちはちよつと前に会った嬢ちゃんに……あれ、燕尾服仮面居ねえじゃねえか」

燕尾服仮面の気配を追って来たのに、燕尾服仮面の姿が見えない。赤毛の兄は首を傾げていた。

「お兄ちゃん、どうやってここまで入って来たの!？」

「こここの門番はデュエリストだぞ。公式大会での俺のファンの一人だ、顔パスだよ」

「そうなの!？」

「まあ変身魔法があるから、軽い魔力検査は受けたけどな」

お兄ちゃんは笑い、そして睨む。怒りを顔に出す。

パウプロロで言えば変化幅MAXのフオークに相当する表情の変化。パウプロロの大正義ヒロイン六道聖でさえキャッチに苦労するであろう落差で例えられるほどに、その変化は鮮烈だった。

怒りが瞳に滾っている。

「それ、と。俺なりに学校の子供に話聞いて、真実ってやつを探って来たぞ」

「「ぎくっ」「」」

「サラ、母さんと父さんにはもうメールした」

「せ、殺生なっ!」

「それとッ!」

ゴン、ゴン、ゴン、とゲンコツ三回。

年長者が”間違ってしまった子供”に、”間違ってしまったことを伝える”ための痛みの形。

三人の頭に、漫画のようなタンコブが出来ていた。

「あだっ！」

「痛い！」

「ウボアー！」

「こいつは！ スジの通らねえことをしたてめえらへの罰だ！」

罰とは、罪の重さを対象に実感させるためにある。

教師のような子供を殴れなくなってしまった大人の代わりに、優しく耐えるだけだったリンネの代わりに、無言で佇むライ少年の代わりに、子供の行動に責任を持つ親の代わりに、彼は妹とその友人に拳を落とした。

”不良の自分が一番失うものがない”と、彼はちゃんと認識していた。

”これは家族の責任だ”とも、彼はちゃんと認識していた。

男は、リンネとライに深々と頭を下げる。ライはずっと無言のまま、リンネは戸惑っていた。

「悪かったな、うちの妹がスジの通らねえ真似をした。」

「お嬢ちゃんは何も悪いことしてなかったのに、最悪に災難だったな」

「あ、はい」

「許してくれとは言わねえ。」

だが、これ以上こいつに同じことはさせねえと誓う。

俺が目を光らせて、何かあればすぐに親に話を回す。

どうかそれで手打ちにしてくんねえか？ この通りだ」

「……はい、分かりました」

結局のところ、リンネのいじめっ子に対する感情は、謝られれば許してしまえる程度のものでしかない。いじめっ子達が“自分達がリンネの眼中に無い”と認識していたのは、正解だったのだ。

男がいじめっ子三人に促して、いじめっ子達三人が嫌々頭を下げれば、リンネはそれだけで——全てを忘れられるというわけではないにしろ——許せてしまう。

それにリンネは、この男が妹とその友達のために、家族のために頭を下げていることに気付いていた。『家族』というフレーズに、リンネは弱い。

許さないなんて、言えるはずもなかった。

リンネは許したが、少年は何の感情も顔に出さず、無愛想に赤毛の兄を見ている。

「……」

「……お前からすれば、最悪なことをした悪人なんだろうけどよ。

悪いとこだけで出来てる人間ってわけでもねえんだ、うちの妹は。

嫌いになつてもいい、許さなくてもいい、だけど憎まないでやってくれ」

「それを決めるのは僕じゃない」

ライにも赤毛の彼の気持ちは分かる。彼が妹のこととリンネのこと、その両方を想つてくれているのも分かる。だがライには、許せる勇氣も立ち向かえる勇氣もない。

彼らの視線の先には、”謝らされている三人”がしぶしぶ頭を下げ、謝罪している姿があつた。

同様に、三人を苦笑して許しているリンネの姿もあつた。

ライは暗に、いじめっ子を許す許さない、憎む憎まないはリンネが決めることで、心配しているようなことは起こり得ないと言っている。

「第一、その頼みは意味が無い」

「……かも、な。悪いことしちゃったよ、本当に……」

この先、赤毛の彼が子供にゲンコツを落としたことが問題になるかもしれない。

諦めなかつたいじめっ子がいじめを再開し、またバレて彼に殴られるかもしれない。

いじめが終わったところで、離れていった友達がすぐ戻って来る、なんてこともないだろう。

だが、それでも。

ここに、いじめは終わったのだ。拍子抜けするくらい簡単に。

「うし、けじめは付けた！

それで、改めてお前らにファイトを申し込む！ 受けてくれるか？」

「いいですとも！」

リンネの返答は妙に元気だ。ずっと頭を悩ませていた問題がなくなったおかげか、とても晴れ晴れとした表情で、声にも張りがある。

「さて、そしたら燕尾服仮面の奴を待つて……」

「いいえ、ここで決着をつけます！」

「……リンネさん？」

いつもの流れなら、燕尾服仮面が来てから遊ぶように勝負する流れ。

だが、今日は違う。

リンネの手の中には最近燕尾服仮面から「暇な時に使うといい」と言われ渡された、

『レトロあそびだいひやつか』がある。

そして胸には、今日ここで全ての決着を付けるといふ勇気がある。

今日この場で勝負の種目を決めるのは、燕尾服仮面ではなく、リンネ・ベルリネッタだった。

彼女は初めて、燕尾服仮面の力を借りずに、因縁に決着をつける決意を固めたのだ。「勝負の内容はこれ！」

本のページが開かれる。そこには図解付きで描かれた、とあるゲームのルールがあった。

『手を二回叩いて溜めたり攻撃したりするやつ』です！」
「なん……だと……!?」

それは、正式名称が不明なまま広範囲に拡大していたある遊び。

試合はワンオンワン一対一で行われ、手をパンパンと二回叩いた後、両選手は両者同時に三種類の行動を許される。

胸の前で腕をクロスさせて行う防御の構え。

攻撃のために必要な溜め数を溜めるために必要な、拳を噛み合わせた溜めの構え。そして、勝利のために必要なかめはめ波っぽい攻撃の構えである。

勝敗が決まるまで、これを繰り返すという勝負だ。

防御は攻撃を無効化するため、相手が溜めを行った時に攻撃することで勝利となる。そして地域によって違うが、複数回溜めることで攻撃が防御を貫通する攻撃となる。

攻め急げば負け、守り過ぎれば負けに近付く。

単純ながらも完成されたルールであり、何よりも読み合いと戦略が必要なことから、『神が創りたもうた究極の完成度』と評されるほどの遊びであった。

「ルールは聖王教会公認ルール！」

溜めが無ければ攻撃はできず！

攻撃するたびに溜めは一つづつ消費！

溜め五回で相手の防御を貫通する攻撃になります！

貫通攻撃と通常攻撃がぶつかった時勝利扱いになる、鏝迫り合いルールは無し！」

これが最後だ。

いじめっ子がリンネに絡んで行けるチャンスも、リンネがいじめっ子との思い出の最後を勝利で飾るチャンスも、これが最後。

勝者は心の平穩を手に入れ、敗者は心に小さく暗い何かを抱えていかなければならぬ。

まるで魔法の世界で最後に拳の決着を望んだメモリア魔法陣のように、バトル漫画のお約束のように、最後の戦いは武器ホビーを捨てた徒手空拳によって行われるのだ。

「言いたいことはいっぱいあるけど、今迂闊なことは言えない……」

この鬱憤！ あんたと最後の会話になりそうな今日、晴らさせてもらおうわ！」

「私だって……燕尾服仮面様が来る前に、一人立ちできる自分になってみせる！」
赤毛のお兄ちゃんの手前口汚く罵れない、なればこそいじめっ子もこれに全身全霊をかける。

リンネもまた、現在の^{いま}問題を全て片付けたこの瞬間にこそ、過去の全てを断ち切り振り切るべく全身全霊をかけていく。

（くっ、『年末はガキ見るから紅白とかどうでもいいよ』

みたいな）もうそんなのどうでもいいよ”感を露骨に顔に浮かべて……

見てなさい、リンネ・ベルリネッタ！ 最後まで、その私達を見てない目を変えさせる！）

いじめっ子達も、生半可な覚悟で挑んだわけではなかった。

「ぐああああつー！」

だが覚醒したリンネに、いじめっ子達は手も足も出ない。一人、また一人と、リンネがかめはめ波のような構え——攻撃の構え——で放った腕力衝撃波に吹き飛ばされていった。

「ひいひいあああういひい！」

フルに溜められた攻撃が、いじめっ子達の防御の上からそれを貫く。

「ぐおおおおおおおつー！」

敵の動きを先読みする知力。十分な反射神経。そして腕力。彼女の姿は、森の賢人ゴリラの継承者にして後継者を名乗るにふさわしいものがあつた。

「リンネさん、才能ある」

「そうかな？ ライ君が言うならそうなのかな」

「格闘技でもやったら、腕力と先読みで敵は居ない」

「……その発言、何か含みない？」

「ない」

いじめっ子達三人を薙ぎ倒し、得意げに胸を張るリンネに少年が水を差す。

少女三人が地に伏せた後は、妹の敵討ちにやる気を出している兄のご登場だ。

「次は俺だな、ククク……」

「よろしくお願いします！」

リンネは友達^{ライ}にいいところを見せようと奮起し、三人を倒したことで自信を付けて、意気揚々と赤毛の彼を瞬殺しようとする。

が。

「ま、負けた!？」

「素直過ぎるな、経験が足らねえ。スジは良いが」

「ううう……」

どうやら、相手の方が一枚上手だったようだ。

この遊びは大体の人間が子供の頃にやる遊びである。なればこそ、この赤毛の兄も小学生の頃十分にやり込んでいる。年季が違うのだ、年季が。

才能は年季を超えることもあれば、年季に押し潰されることもある。

悔しそうにうなだれるリンネを見て、少年の無愛想な顔の目の色が変わった。

少年はリンネの肩を軽く叩いて、前に出る。

「ライ君？」

「次は僕」

「ほーん？ お嬢ちゃんのナイトさんの登場か」

男と少年が対峙し、構える。

廊下の方で誰かが歩く足音、妖怪ウオッチ特有の音が鳴り、それが時代の寵児たる二人の戦いの合図となった。

男と少年の腕が、動く。

その瞬間、彼らの両手は光を超えた。

大気が引きちぎられる。風が鳴る。空間に光が走る。

バチバチバチと、動作の前に課せられた”手を二回叩かなければならない”という義務が、絶え間ない連続打撃音となって響いていた。

その連打速度たるや、ゲームセンサーあらしの炎のコマに匹敵する。

音が鳴っていない瞬間を探す方が難しいほどの攻防が繰り広げられ、男と少年は攻撃・防御・溜めを十数の残像を残しながら連発していった。

「み、見えない！ 手の動きが見えない！」

「何てスピード！ 何てデタラメな精密動作！ 両者共に星の白金の域！」

その腕の軌跡は既に星を越え月のそれに至っている！

月を描く腕の動き、その残像が宙に描く影、これで騎士ナイトというのなら……

今のライ・ドローン君に異名を付けるとすれば、月影の騎士ナイト以外の名前は似合わないッ！」

「あれ、この動き、あいつもしかして中の人……いや仮面はどこに……」

当然だが、人間が光の速度を超えられるわけがない。ファンタジーやメルヘンじゃあるまいし。

凄い速さで動き、緩急を付けて動いているため、そう見えているだけだ。

二人の心の姿勢は速度勝負に集中し、既にソニックフォーム・ザ・ヘッジホッグ。

体格差の問題で男に速度で劣っているライは、ビューティフルジョーのマックススピードを魔法で再現し、なんとか食い下がっていた。

そして最後は、『勝ちたい』という気持ちが強い方が勝った。

「俺の、負けだ」

「ん」

「おお……！ やったねライ君！」

男は溜めの構え、少年は攻撃の構え。

少年の勝利を自分のことのように嬉しがって接近して来るリンネに、ライは顔ごと逸らして対応した。

「お前、ただ者じゃないな……？」

「さあ」

ライはかつて、超能力者育成ファミコンゲーム・マインドシーカーで腕を磨いた猛者だ。

超能力者でこそないが、シンプルな仕組みの駆け引き勝負なら結構強い。

この場でライが本質的に勝てないのは、リンネのみだ。

不思議なことに、燕尾服仮面級の強さを彼は持っていた。

「さて、ちょうどいい感じに勝ち負けが散つちまったな……どうしたもんか、もう一勝負」

次の勝負はもう一度これをやるか、別のものをやるか。顎に手を当てた赤毛の彼に、ライの方が主体で繋がれた念話が届く。

(ファミコンやります?)

(こいつ直接脳内に……! できるわけねーだろ! ここ学校だぞ!)

リンネが先の種目を決めたなら、今度はいじめっ子サイド、あるいは赤毛の兄貴が種目を決める番だ。だが今の種目を繰り返しても勝機がないことに赤毛の彼は気付いていた。

ストIIにおけるリンネガイルリネッタに対するザンギベルリネッタくらいには勝ち目がない。

せめてリンネダルシムツタかりンネベルサガットくらいの勝ち目は欲しいところだ。

(この嬢ちゃんはともかく、この坊主の動きは厄介だ。

この種目を繰り返しても勝ち目はない。

手をパンパンと叩く動きが、まるで祈りの所作のようだ。

しかもその祈りの所作が異様に速い。何故か観音を連想させる。

こいつに手の平を合わせた祈りの所作を取らせれば、どんな遊びでも敗北は必至……ならば!)

男は二つの拳を振り上げた。

そして大きく弧を描き、自信を中心とした∞の軌跡を残し、二つの拳を貝合せにする。拳を合わせて、祈るかのようなその姿勢。

合わされた二つの拳から、二本の指が柱のごとく立てられていた。

「決めたぜ、種目はコイツだ。ルールは聖王教会公認ルール！」

「……『指スマ』……！」

先の種目が『正式名称が存在しない遊び』であるならば、この遊びはその対極。

『正式名称が多すぎる遊び』である。

「指スマ」「チョメチョメ」「バリチツチ」「チーバリ」などなど、地域によつて多様な呼び方が存在するも、違うのは掛け声だけだ。

対戦者は二本の指、すなわち両手の親指を動かす権利を持つ。

そして「指スマ○」「チョメチョメ○」「バリチツチ○」「チーバリ○」などの掛け声を出し、この○に数字を当てはめ、親指を立てるか寝かせたままかを選ぶことができる。

そして参加者が立てた指の総数と○の数字が一致すると片手を脱落させることができ、両手を脱落させた者から勝者となつていく、そういうゲームだ。

例えば二人で対戦するとする。

数字の範囲は0～4となるので、これ以外の数字を口に出すのは無意味。

自分が指を上げなければ範囲は0～2、両方上げれば2～4となるので、この範囲を指定しなければ……といった感じに、自分の行動と相手の行動を考慮した数字指定が必要となる。

これまた、シンプルながらも非常に高い完成度の遊びと言えよう。

しかもこれは、参加人数が多すぎると中々決着がつかなくなるものの、複数人が参加できるという大きな利点があった。

”人数が半端でハブられる一人”が発生しないのである。

その中毒性から、『悪魔が創りたもうた至高の完成度』と評されるほどの遊びであった。

「最初くらいは、形式はそつちに選ばせてやるよ。坊主、嬢ちゃん」

「……なら、チーム戦で。代わりにそつちは四人でいい」

「おいおい、人数差倍じゃ勝負にならねえぞ」

「なる」

赤毛のアンちゃん(男)は元より、いじめっ子達のグループに入るつもりはなかった。

この遊びならチーム戦ができるものの、人数差がある以上公平ではない。

いじめっ子がチーム戦を提案したなら、赤毛の彼はリンネ達の味方につくつもりだった。

だがライは、ライ&リンネVS四人という試合形式を指定した。

彼は無愛想なまま、信頼を見せる。

「僕なら……いや、僕とリンネさんなら、絶対に勝てる」

「――！　うん、うんうん！」

人の言と書いて信。

言葉もなく信じて貰えることもあるが、それを期待してはならない。

信頼とは言葉で、会話で勝ち取るものだ。

リンネの隣には友が居る。

奇縁で繋がった友が居る。

されど、それはリンネの行動の結果として得たものではない。

運が良かった、そこに善意があつた、ただそれだけのこと。

始まりを辿るならばきつと、『お友達がたくさん出来ますように』と願いを込めてスクーデリアを娘に贈つた、ローリー・ベルリネツタの愛と願いが現実に実を結んだ。ただそれだけのこと。

「行くぞー！」

「私達の戦いはここからだ！」

少年がリンネに勝てると言つたのなら、きつと勝てるのだろう。

その言葉は、いじめっ子についた嘘とは正反対のそれ。

この勝負の結末は既に見えている。

リンネが種目を提示した一戦目、赤毛の彼が種目を提示した二戦目、ならばいじめっ

子達が種目を決める三戦目もあるのだろうが、何も心配はない。ライとリンネは勝つだろう。

燕尾服仮面が居なければ何も解決できなかったリンネの時間は、もう終わったのだから。

心に決着をつけ、いじめっ子達と赤毛の彼が帰って行くのを見送り、リンネは昇降口で立ち尽くす。彼女の視線の先には、天気予報を裏切って大振りの雨が降り注いでいた。

今日は迎えの車が来ない。そういう予定になっていた。

皆が忙しくしていた上、リンネ自身が皆に迷惑をかけたくないからと、迎えの車を携帯電話で断つたのもそれに拍車をかける。

けれど、後悔はない。

今日の彼女は、自分の足で、胸を張って、誇らしい気分で帰りたい気持ちだったから。

「……すつこい雨」

当然だが、天気予報にないこの大雨を前にして、リンネの手元に傘は無い。

そんな少女の横に現れた少年が、少女に青い傘を差し出した。

「はい」

「え、ライ君？ これライ君の傘じゃ……」

「心配ない。先週置き傘してたから二本持つてる」

「そうなんだー」

「そうなんだ」

納得した様子のリンネに傘を渡し、少年は踵を返す。

「僕、職員室に用があるから」

「うん、また明日」

「また明日」

そして職員室に行くフリをして、15分ほど物陰で小説を読んで時間を潰す。小説のタイトルは『献身』。リンネとはち合わせないよう時間を空けてから、彼は帰路についてた。

彼の手元に傘は無い。

物を大切にすることの少年が、盗まれる可能性を考慮せず何日も置き傘するわけがな

い。

少年は鞆を頭の上に構えて一人、雨の中を走り出した。

「……さむい」

雨が服を濡らす。服の隙間から肌を濡らす。

ばしやりばしやりと水飛沫を上げる水たまりが、靴の中を濡らす。

胸の中は熱くても、体の中は冷え切っていた。

傘は無く、後悔も無い。

水たまりを踏み抜きながら、少年は帰り道の角を曲がる。

そして、曲がった先のコンビニで。

ビニール傘を買って出て来た、リンネ・ベルリネツタの姿を見た。

リンネは感謝と呆れが入り混じった表情を浮かべて、少年に歩み寄って来る。

「……あ」

「はい」

冷え切った少年の指先に、暖かな少女の指先が触れ、少年の手に傘が握られる。

「私二本持つてるから、心配ないよ」

「……意趣返し？」

「恩返しだよ」

リンネが笑う。花が咲くように笑う。

彼女の気遣いに、少年は自分が少し前にした行動を、少し恥ずかしく思ってしまう。「途中まで一緒に帰ろ？」

「……ん」

帰り道は違うけれど、少しだけ一緒に歩くことはできる。

少しだけ話すことはできる。

二人の小学生は友達として、楽しく話しながら、家に帰って行った。

不幸な少女は、こうして富幸ふこうになった。

じゃぼにかじゃんけんじゃぼにかほいで不敗を目指す者達へ

時が流れ、季節も流れ、リンネ・ベルリネツタが中等部に進む時が来た。

そう、今日は卒業式なのだ。

本来ならば、この日は晴れやかな気持ちで迎えられ、誇らしい気持ちでこの日は終わる。

だが今日この日、友人に挨拶回りしている途中でリンネは、かのいじめっ子三人に空き教室に連れ込まれていた。

「……………こうしてあなた達に囲まれるのも、随分懐かしい気がしますね」

ここは三階の空き教室。

窓から外を見下ろせば、しょっちゅうおはスタを見逃してそうな顔の子供、おっはーでマヨチュツチュしてそんな顔の親など、多種多様な子供と親が暖かに触れ合っている。

リンネも外で他の親と談笑しているダンやローリーの下に行きたかったが、それ以上に強い気持ちを胸に、いじめっ子達と向き合っていた。

「レクやクラスの団体行動で一緒になることはあっても、最後まで友達ではなくて……」
結局、リンネが許したことではじめは終局を迎えたが、だからといってはじめっ子達とリンネが友達になったというわけではなかった。

元いじめっ子と元いじめられっ子という距離感。

学校行事で一緒になれば会話一つなく協力する関係。

クラスが分かれて顔を合わせる機会が減ったら、それつきり。

リンネの周りに普通の友達が増え、リンネが学校に再度溶け込み始めてからも、いじめっ子達は何のアクションも起こさなかった。

そして、このタイミングでの呼び出し。

リンネは嫌な予感しかしていなかった。

「卒業前に最後に……ということでしょうか」

「何か勘違いしてない？ ベルリネッタさん」

「？」

「私達はね、別にサラのお兄ちゃんが怖くてあなたに絡むのをやめたわけじゃないの。

……いや、あのゲンコツは怖いけど。いやそうじゃなくて。

私達はあなたに思い知らせてやろうとずっと機会を窺ってて……途中で心折れたの

「よ」

「心が折れた？」

だが、いじめっ子達の様子がおかしい。

「私達が止まったのは、彼があまりにも哀れだったから……」

「お前……お前……卒業直前まで色んな奴に絡まれて、そのたび助けてもらってたくせして……」

「結局一度も正体に気付かないし……私達、彼があんまりにも哀れで……」

「気付く？」

「ベルリネッタさんが鈍いのも、絡まれやすいのも知ってたけど……えぐっ……！」

「でも、絡まれるたびああいう流れになって、だいたい解決して……ひくっ、ひくっ……」

「！」

「なのに気付かないのが……頑張りが気付かれてないのが……哀れで……えうっ……」

「！」

「え、ガチ泣き!? ちょっと待ってください、三人揃って何故ガチ泣きしてるんですか

!？」

いじめっ子三人は、巨人の星のような泣き方をしている。

ガチ泣きだ。

そのせいでリンネの方がオロオロしてしまっている。

リンネは異性にモテる上に鈍感で、そういった理由もあって卒業まで結構な人数の同性とトラブルを起こしていたが、そのたびに燕尾服仮面が表れ、時に燕尾服仮面主導で、時にリンネ主導で、それらのトラブルを解決してきた。

それは分かる。リンネにも分かる。だが彼女らが泣いている理由は分からない。

「鈍感……！」

「鈍感……！」

「鈍感……！」

「合唱みたいにならせて言わないでください！」

コロコロホビー界などを中心に、ホビー界は主人公の年齢を低年齢に設定することが多い。

共感と感情移入は別のものだが、ホビー界においてこれは共感から感情移入に繋げるものだ。

共感とは読者・視聴者と作中キャラに共通点を見つけさせるもの。感情移入とは大なり小なり作中のキャラを読者・視聴者の分身とさせるもの。

低年齢のキャラは低年齢のファンに共感を呼び、主人公や人気の脇キャラは大なり小なりファンの分身となり、友情と努力と勝利を重ねていく。

感情移入。現実においてそれは、“情が湧く”とも表現される。

いじめっ子達は、情を持ってしまった。

リンネに復讐する機会を探し、影から見ている内に燕尾服仮面の中身に気付き、いつの間にか燕尾服仮面を応援するようになっていた。

鈍感主人公・リンネのために頑張るも、ある一定のラインを越えた関係になれずにいる、サブヒロイン・ライに、感情移入してしまったのだ。

鈍感主人公がヒロインを落とすのは簡単だが、その逆は難しい。

パワポケを始めとするゲームに存在した『惚れたヒロインを攻略できないバグ』。いじめっ子達はそれを乗算化させたようなダメージを受け——心折れたのだ。

「ベルリネッタさん、本当にやめてよ……！」

「あいつ顔を隠してないと話したいように話せないシャイガイなの……」

あいつが勇氣出して下駄箱に呼び出しの手紙入れてて……！

！
とうとう全てを打ち明けるのか！ って私達、喜んで陰ながら応援してたの……！

「あなた午前中に熱出して、下駄箱通らずに帰っちゃうって何……!?!」

放課後に、誰も居ない放課後に……あいつ一人寂しく手紙回収してたのよ……?」

「え、え、断片的で代名詞が多くて話が見えないです」

いじめっ子達の中でリンネは『生意気で調子に乗っている女』だった。

ゆえに、痛めつけようとした。

だが途中から、『鈍感という名の難攻不落で鉄の城』になっていた。

ゆえに、痛めつけるのではなく攻略の道筋を探さなければならなかった。

この違いは大きい。

サンドバッグと難攻不落の要塞ならば、向き合うのに必要な心構えの質が違う。

さながらリンネは風雲たけし城。大半の挑戦者にとつてのS A S U K Eステージに匹敵する強大な壁。最初にヒトカゲを選んだ幼い子供にとつてのタケシとカスミのよ
うな存在であった。

みのもんにファイナルアンサーと言った後の、無駄に引き伸ばす時間の緊張、それ
に等しい心に負荷がかかる日々。心も折れるというものだ。

「……まあ、あれよ。中等部でもドローン君と仲良くねって話」

「? 言われなくても。仲がいいお友達ですから」

「いいお友達か」

「いいお友達かあ」

「いいお友達ねえ」

「な、なんですかもう！」

そうやってからかう人時々居ますけど、そういうのじゃないですから！

ライ君に失礼ですよ！」

「チッ」

「舌打ち!?!」

あいのりがヤラセでないと思っている子供のような、純粹さと天然さ。こういうところは彼女の美点でもあり、いじめの原因となる欠点でもある。

「本題に入るわ。私達は勇気が足りないあいつの後押しを——」

「余計な口出しは止めてもらおう」

「!」

と、その瞬間。リンネ・ベルリネッタのためではなく、ライ・ドローンのためにいじめっ子の言葉を遮る、仮面と燕尾服の男が現れた。

「この声とバラは……燕尾服仮面様!」

「シャイな少年を恥ずか死させようとする外道ども。その行動、私が許さん」

「……」

「……」

「……ごめんね、余計なことしたね……」

燕尾服仮面を見た途端、いじめっ子達は目を覆う。

彼は意図的にいじめっ子達のそのモーションを無視し、リンネといじめっ子合わせた

四人に、ちよつと格式張つた包装に包まれたペンを一本づつ渡した。

「卒業祝いだ、受け取りたまえ」

「あ、シャーペンだ。ありがとう」

「これは……『ドクターグリップ』！」

「説明お願いサラ！」

「1991年に生まれ、その後じわじわ時間をかけ学生の人気を勝ち取つたベリーエス！」

『ロケツトペンシル』『いい匂いのねりけし』等と同じ一世を風靡した文房具！

かつ、それらとは違い現在でも根強い支持を受ける長寿ヒットシリーズ！

当時、手に持つ所が柔らかければⅡでドクターグリップだという風潮があつたほどのもの！

後に同種が増え！持つ所が柔らかいペン類の一つでしかなかったもの！

遠い昔から今に至るまで多くの子供達が求める、世間話になつた神話！即ち生ける

伝説！」

「サラ！ 今日も気持ち悪い！」

「キレッキレに気持ち悪い！」

要するにちよつとハイカラなペンのプレゼントでしかないのだが、受け取つて礼を

言ってから、いじめっ子の一人は不思議そうに問いかけた。

「でも、いいの？ 私達のこと、てつきり嫌つてると思つてた」

「誰にでも悔いる機会はある、誰にでもやり直す機会はある。」

それは許された人間も、許されていない人間も変わらない。子供であるなら、尚更に「……」

「同じホビーで幾度となく遊んだ仲だ。情も湧くさ」

許すとも、許さないとも言わない。情が湧いただけ。それが、燕尾服仮面の距離感だった。

いじめっ子達も中等部に進学するため、永遠の別れとはならない。

だが今日は卒業式だ。シチュと相まってちよつとしみりしてしまう。

「そうだ、ベルリネッタ嬢。ライ・ドローンからの伝言だ。校舎外れの桜の木の下で待つ、と」

「なんだろう……ありがとうございます。伝えてくれて」

「十分後くらいに行く、だそうだ」

リンネが教室を出て行く。いじめっ子も燕尾服仮面も放り出していく辺り、彼女の中の『友達』の重さが分かるというものだ。

これで昔からの友達なんて出て来たら、それこそんでもない思い入れが見れそうで

ある。

リンネを桜の木の下に向かわせ、燕尾服仮面は無造作に、顔を隠していた仮面を外した。

仮面の下から現れたのは、なんと驚くべきことに——変身魔法で大人の姿になった、ライ・ドローンの顔があつた。

「僕も正体を明かす勇気を、振り絞らないと」

「まさか……ドローン君、あなたは……」

藤崎詩織という「〇崎で〇織とか零崎一賊の女性名か何かかな？」と言われた伝説のラスボスヒロインが、数多くのプレイヤーを殺してきたイベント……！

全てを打ち明けてからの、『桜の樹の下で告白』である。

この学園には、桜の木の下で告白することで、“メールで告白する”というクソチキンメンタル行動で彼女が出来る確率を告白成功率の最低値保証として得られる、という伝説があつた。

固定値を神聖視する学生に、この桜の木は特に評価されている。

「彼女はちよつと人の気持ちが変わらないところあるし、それで問題起こすこともあるけど……」

「まあ、その、なんだ」

「あなたが一番フラグ立ってると思うよ、どっちの姿でも。他の人よりマシではあるはず」

「0%より1%の方が可能性はあるよ、みたいな言い方はやめていただきたい」

付け直した仮面越しに彼がツッコむ。彼はこれからこの姿でリンネに会いに行き、彼女の目の前で魔法を解除して、正体と正直な気持ちを諸共に明かすのだろう。

大切なのは、自分の心に正直であること。

この学校で一番大切な友人に、隠し事をするのをやめること。

そして……『素顔で勇気を出すこと』だ。

ライにとって、これはただ恋心を告げるだけのイベントではないのである。

いじめっ子達は既に、『学校へ行こう』の屋上での叫びに挑もうとしている友人を見守るようなドキドキ感で、ライ＝燕尾服仮面を見守っている。

「行くの、ライ・ドローン君……!」

「気持ちに分かるけど、死ににいくようなものじゃない!」

「可能性はゼロじゃない……ゼロじゃないけど……! 漢だよ、ドローン君……!」

「人を爆弾抱えた自爆特攻者みたいに言うのはやめていただきたい」

絶対成功しねえだろうなあ、と思いつつ、いじめっ子達は彼の成功を祈っている。

あいのりがヤラセだったとしても、彼のその気持ちは、ヤラセなんかじゃないのだから

ら。

「待つて。そういえば今日使おうと、今日の遊び道具は私が持つてきたんだつたわ」
 「なんと、珍しい。今日は雨が降るのかな?」

「残念ながら快晴よ。今日一日くらい、あんたの流儀に合わせてあげる」

「こんな格言を知っているだろうか?」

——リリカルなのはの物語の締めくくりは、リボンで終わる。

「りぼん（ミッド版）の付録に付いてた、恋愛相性判断心理テストよ!」

「それは! ミッドの恥知らずな出版社がパクったと評判の少女漫画雑誌の付録!」

『心理テスト』。

それは学生が大好きで、大人になるとバカらしくなってやらなくなってしまふもの。

「血液型性格診断って日本発祥で日本周囲くらいしか定着してないよ」と言われ、「血液型占いて何の根拠も無いよ」と言われ、「むしろ血液型を理由に何の根拠もなく他人の性格を決めちゃうのが最近問題になってるんだよ」と言われ、子供は大人になっていく。

ちなみに血液型性格を判断する風潮は昨今廃れているので、最近の子供達は血液型で性格を判断するという考え方そのものを知らないことも多いのだとか。

子供が好む心理テストは簡単で、かつ根拠がない。

なのにそれっぽいので子供は騙される。しかも集団でワイワイやってると楽しいのだ。

手軽で楽しい、教室でもできる、男子と女子が混ざってやれる。ゆえに子供に好まれた。

その後脳内メーカーや診断メーカーなどに形を変え、とりあえず根拠なく何かしらの答えを生み出すという類の娯楽は、社会の中に浸透していった。

そしてその一角が、今机の上に叩きつけられている。

「まずここに本名を書きなさい、燕尾服仮面様」

「はいはいライ・ドローンつと……」

「ここに名前、血液型、誕生日を書いて」

「はいはい、つと」

「え、あんた早生まれだったの？ 通りで背が小さ……まあいいか。」

じゃあもう一枚の紙に前に調べた時見たベルリネツタさんの書き込んで……」

学者が「そののどこに根拠があるんだよ」と散々言ってきた過程。

学生が「これで相性が分かるんだ！」と散々言ってきた過程。

”今日の占いかウントダウン”を超える確かな実績と信憑性。

それが、ライとリンネの相性を導き出す。

「出たわ！ あなた達二人の相性はバツチリよ！」

「わー嬉しいなー……でも言うとも思ったか」

「いいじゃない、信じなさい。占いなんていい結果だけ信じてればいいのよ！」

いじめっ子は無理やり占いの結果を燕尾服仮面のポツケにねじ込んだ。

「……前、ライ・ドローンに対しても。」

燕尾服仮面に対しても。

同じことを思ったことがあるわ。

なんでこんな女の味方するんだろうって。弱みでも握られてるんじゃないかって

いじめっ子は顎に手を当て、うんうんと頷いている。

「でも、本当にそうだとは思わなかったわ。あなた、惚れた弱みを握られてたのね」

仮面を付けたままなのに。その瞬間から、仮面の裏でライは普段の自分に戻ってしま

う。

「……少なくとも、最初に助けた時は。」

リンネさんを女の子として好きだったからじゃなく、人間として好きだったのが理由

だった」

「本質的におんなじじゃない、そんなの」

「……」

「愛よ、愛！」

恋も友情も信頼も、親近感も共感も尊敬も、行くところまで行けば全部愛！ おんなじ

よー！」

「……雑な人」

「じゃああなたはきつと、繊細すぎるのよ。大丈夫大丈夫！」

上手く行かなかつたとしても、ベルリネツタさんが意識してくれるかもしれないでしよー！」

「頑張つて頑張つて！」

「フラれたらパフェの一個くらいは奢つてあげるからさー！」

友達じゃない。友達じゃないから無責任なことが言える。

情が湧いた相手。だから成功と失敗なら、成功であつて欲しいと思つている。

彼女らはリンネが嫌いだ、彼は彼女らにとって、嫌いな女の味方をした少年でしかなくて。

奇妙な応援と、奇妙な縁と、奇妙な後押しがあつた。

彼が全てを打ち明け、告白した後、どうなったか……それは、この物語では語らない。

それは『燕尾服仮面』がリンネの前から消えた後のことであり、語る必要のないことだ。

「好きな子のために立ち上がれるなら、好きな子に立ち向かうくらい簡単でしょ！ほら早く！」

「……この人ら、今でもいじめっ子だ」

この物語は、燕尾服仮面の物語なのだから。